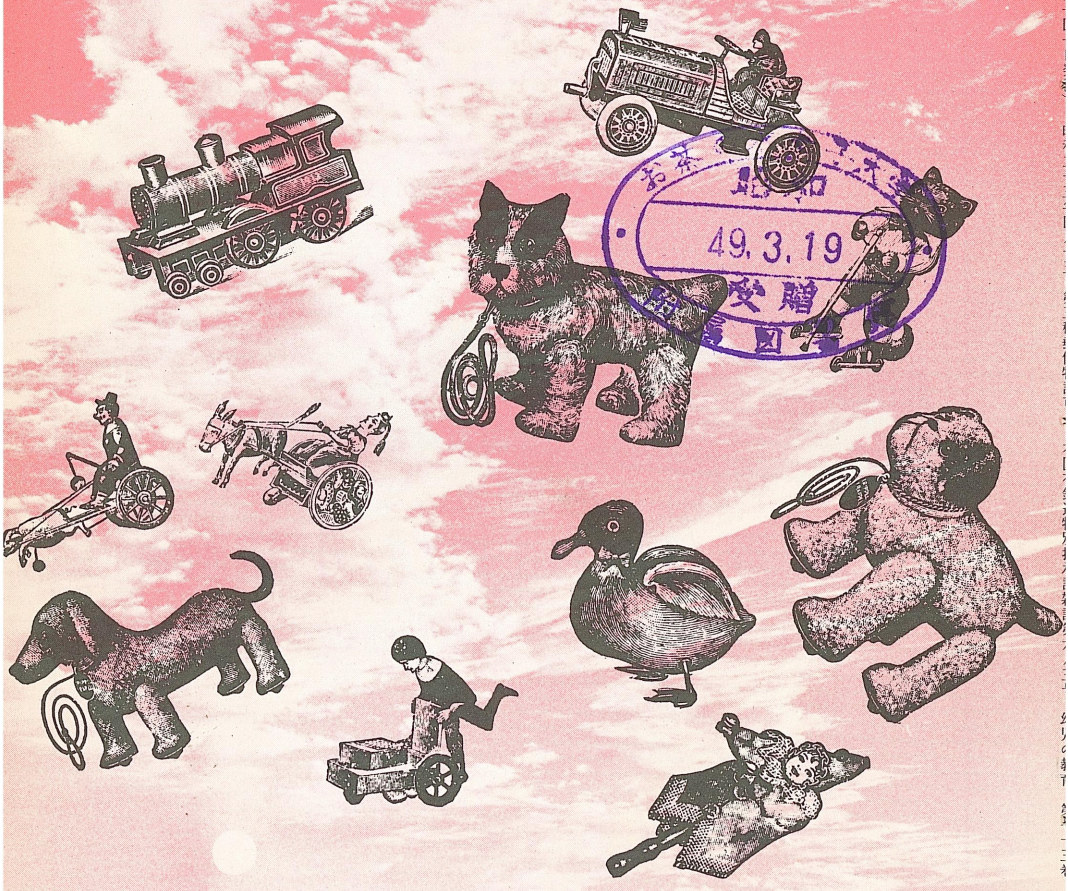
家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



49.3.19
受贈
図書室

4

第七十三巻　第四号　日本幼稚園協会

全6巻

豊かな保育の世界がここから始まる

保育カリキュラム資料

フレーベル館編

春/夏/秋/冬/遊び/小事典 近刊

B5判・136ページ・各巻定価600円(〒110円)

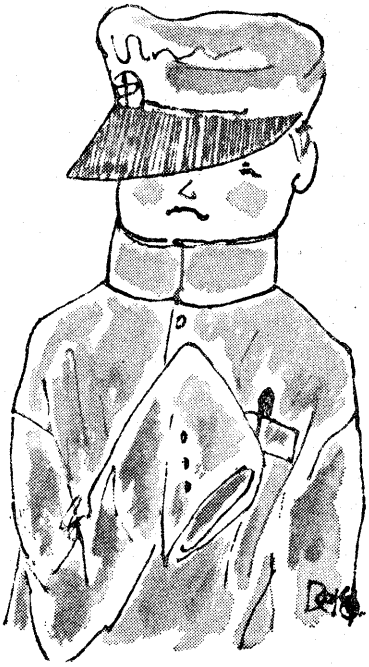
子どもは一時としてじっとしてはおりません。その一瞬一瞬を力いっぱい活動し生活しているのです。せっかく苦心して作り上げたカリキュラム表も、あっというまにくずれさることもしばしばです。
そんなとき、いつ、どこででもすぐに役立つのがこの資料集です。あしたのカリキュラムのためのヒントを集めた、あなたのための保育ハンドブックです。

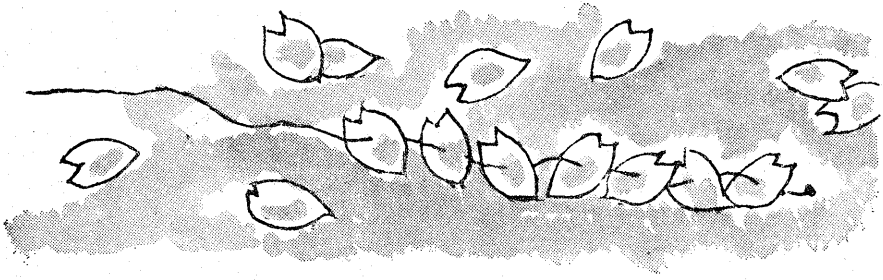
●お求めは弊社代理店・支社・支店・営業所へどうぞ

株式会社 フレーベル館

幼児の教育

第七十三巻　第四号





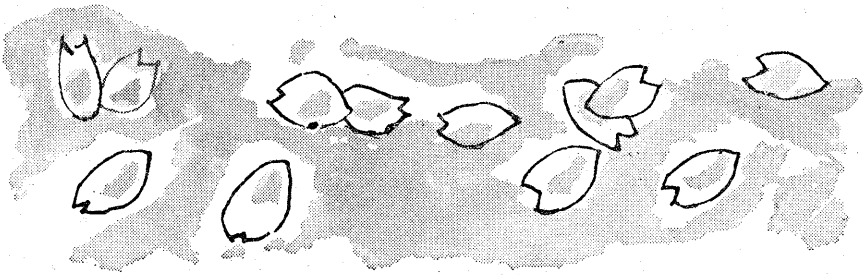
幼児の教育　目次

——第七十三巻　四月号——

表紙　司　修
カット　中島英子

©1974
日本幼稚園協会

ヨーロッパ一人旅から帰って……周郷　博…(4)
一つの出会い……秋山達子…(7)
「受け入れるということ」を考える
—「母なる館グリーン・ノウの物語」を媒介として—……本田和子…(11)
出会い—新米先生と三十三人の子ども—……梅田宣子…(19)
篤志のある一日……平井和貴子…(22)
子どもをもっている親と音楽……徳丸吉彦…(25)



幼児と音楽　〝心から歌う〟……相馬誠子…(29)

私の保育—保育者二年生の記—……桑田幸子…(33)

橋詰良一著
「家なき幼稚園の主張と実際」より　(三)……(38)

★講演

幼児にあらわれた人間の原型……津守真…(45)

ヨーロッパ一人旅から帰って

周郷博

1　ひそやかな決意―一人旅

私は、ことしの春お茶の水女子大を停年退職し、戦後二十数年の教師（教授）生活の最後の四年間「四苦八苦して」やってきた附属幼稚園長併任という職からも離れた。「すくなくも一年間はどんな職にもつかない」と腹をきめて、渋沢丘陵の「山羊の家」で畑を耕し、山や川を清く保ち「乏しさ」のなかでほんとうの〝勉強〟を生活してみようと心にきめた。「惰性を切る」――大学教授という肩書きや時流、消費文化（知識さえ使い捨て消費物になり下がった？）に「乗って」ものを考えたり行動してはいけない、それを自ら実行しなければ、と考えた。

それと、一つは大陸中国の文革後の社会と教育の「創られてゆく」実体を肌で知って「学びたい」、という園長在任中からの切なる希望をいよいよ熱烈に持ったが、それは先方の〝招待〟によることでせいても仕方ない。が、ことしにはいって数が増した中国要人たちの訪日の挨拶が一貫して「子々孫々まで」中国と日本がよき友人であろうとする声（課題）を私はその都度、私の（いや私たちの）大きな課題だと切実に感じさせられている。文学・出版の訪日団の団長として来られた厳文井さんなどとは小人数で歓談する機会にもめぐまれたが、「いま生まれた子どもはたちまち二十歳になります……幼い子どものときに何が正しいことで何がまちがっていることかをよく教えておかなくてはなりません」といったことが淡々として語られ、私は「おやッ」というように日本の子どもたちの現在の育ちかたにいっそう深く疑問をもち「これではいかん」と思う。ことば（日本語）の崩れ、価値観、モラル、「趣味」の地すべり的低俗化のひどさに、一人でやきもきする。「子々孫々」という感覚も、「ふるさと」感覚も、日本人にはもうないみたいなのだ。園長在任の四年に、身をけずる思いで考

え悩みぬいたこの「子々孫々まで」を根にすえた、子どもの育てかたと、教育というもののありようを求めて、私は思い切って、まずヨーロッパへの一人旅にでた。かねがねシベリヤ鉄道に乗ってみたいと思っていたそのシベリヤの東のはてを、十月半ばの人気(ひとけ)のない荒涼とした白い月夜の汽車でハバロフスクへ。そこからアエロフロートでモスクワへ。

2 〝何者か〟に—〝誰か〟に出会うだろう……

十六世紀、信長の少しまえにコサックの隊長が「つくった」という北の町ハバロフスク。空港に置いてある無償の本の中からレニンの「社会民主々義について」という小冊子（フランス語）を手に入れて、飛行機の中でも読みつづける。エンゲルス、マルクス、レニンの「メシヤ的な情熱」（地上のことに重点をかけたメシヤ）の結晶（プロレタリヤ官僚主義—独裁のところで「止っている」？）を実感をもってモスクワで見ることになる。これも大いに〝勉強〟に（課題に）なったが、ここでは触れない。シベリヤの旅の間に、日本に二十三年ミッションのしごとでいたという、七十三歳になる品のいいおバアちゃんマキーナさんと連れの若い女性と親しくした。教師でフィンランドへ帰るのだと言う。「いまは世の終りです」としんみり語った言葉が胸に残る。

モスクワに三日滞在。それから、一人でロンドンへ発ったが、雪模様の曇り空はその午後きれいに晴れ上がって、空港までの一時間の田舎道はなつかしく鄙(ひな)びていた。飛行機に乗って、私はもう一度「なぜこんな一人旅に出たのか？」を考えた。「観光」ではない！「（未来）を見るための旅なのだ」「内容は不十分であっても、スケールを持て（保て）」そうだ、テイヤールの主著「人間の現象」を「（再び）読み通す、旅の内に」そんなふうに「さだまらない覚悟」を自分に促しながら、でも、「何か」に「誰か」に会えそうな「気がして」いた。ところが、その夕刻ロンドン（ヒースロー空港）に降りて、私ははじめて異郷の地で「野宿」でもするほかないと「心ぼそさ」と焦慮を経験した。荷物を受けとったりして空港をでて夜風にあたったのは九時を回っていた。伝言のようなものに注意したが何もない。空港に降り立つとき、これからロンドンでご主人と一緒に住むために同じ機に乗っていたという、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた、若い私の大学の教え子、ユキノさんとパッタリ会ったりしたが、……一人取り残されたあとの心ぼそさ。やっと、タクシーをたのんでBOACのターミナルにたどりつき、そこでホテルを世話してもらって一夜を過ごす。一人旅の〝心ぼそさ〟と〝出会い〟の楽しみが始まったのである。

翌日の午後、「人間の未来のためのテイヤール・センター」へ行って、名誉秘書のルネ＝マリー・パーリーさんや、リーズ大学のウルスラ・キング教授、ミス・スウィーニーさんなどが、この「突然の訪問 surprise visit」を心から歓迎してくれて、とっておいてくれたホテルに落ちついた。私はもう孤独ではなかった。ホテルの予約を知らせてくれた航空便を私は見ずに東京を発ってしまったのである。

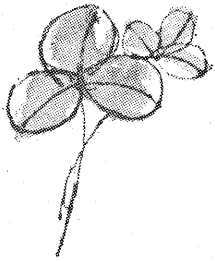
3　思いもうけない〝発見〟

この旅の「予定された」目的は、この「テイヤール・センター」の「つぎの七年 Next Seven Years」という会合に出ることだけ。私は日本人として二人目の会員（現在三人いる）。「人間の未来のためのテイヤール・センター」は六〇年代の初期に動きだし、七年前の六六年、中国の文革といっしょの時期にできた。私はジョゼフ・ニーダムを会長とするこの集りに特別な親近感をもって接触をもってきた。が、それ以外はぜんぶ不定形、私の一存、偶然、漠とした友情、人間的なつながりの中にまかされていた。

二十七日のその会合（国際的な）のまえに、着いて間もなくSMC（新しい環境の中での市民の徳 Civic Virtue）という集りに連れていかれて、いろいろな人に紹介され、あとでリーズの集会にも出ることになった。私は、こういう性質の、共通の基盤の発見というかたちでの「市民の徳」というものが動き出し、地方に自主性をもたせて「形骸化」した学校教育に新精神を吹き込むことを日本でもやらなくては、とホテルで構想したりした。バックミンスター・フーラー（ノーベル平和賞候補になった建築家）の「手垢のついた神さまはもうまっぴら No More Second Hand God」の言いかたを借りれば、「手垢のついた道徳」さらに「手垢でよごれた教育」は、無用ばかりか早期に子どもの心（mind）を破壊するものだ――そういった「道筋」が、二十七日の集会、パリに行ってOECDのペーター・マイエル夫妻の家で夕食後夜中までの話（奥さんはフランス人でロシヤ語の教師―この人の車でフランスの田舎を一日、日暮過ぎまで回り、親身にフランスの六〇年代以後の混乱と絶望をきいた）、イワン・イリイッチの「コンヴィヴァリテ Convivalite」の評判、ウィーンの四日間のヨハネス君、ハンナ・フィシャーさん、辻さん夫妻との親身な話合いで、ずんずん深まりひろがって、「水を得た魚」のように私の精神的な働きは、生きかえった思いだった。教育はもはや制度の小手先のしごとではない。「大人物」の手を待っている――それがもう始まっている――紀元二〇〇〇年を目ざした「長つづきする教育 éducation permanente」への、混乱のなかの着実な歩みが。

一つの出会い

秋山達子



北欧の長い夕暮のひと時、西の空に沈みかけてなかなか沈みきらない太陽が、あたりに静かなバラ色の光を投げかけていた。それは、はじめてヨーロッパに旅してまだ一月にもならなかったころのことで、そしてはじめての予期しなかったご招待にあずかって、私はコペンハーゲン大学の教授、ソエ博士家の、親しみやすい木造りの玄関の前に立った。

今であったらば、このようなご招待は儀礼的なものと解釈して、おそらく辞退していたことと思う。ソエ博士のご専門のキェルケゴールに関して、そのころはまだまったく無知であったし、その後の長いヨーロッパ滞在や、数度の旅行で知った西欧の学究に携わる人々の世界は、外国の一女性の訪問などを拒絶するような厳しいふん囲気をもっている。そこには学者のひそかな質素な生活のペースがあり、専門外の一素人がかき乱すなどということはとても考えられない。それに、北ヨーロッパの生活は一般に閉鎖的で、訪問なども何日も前から時間を限って約束しておかなければならないし、近くまできたのでちょっと寄ってみるなどという日本的な気楽さは、よい意味でも、悪い意味でも通用しない。

しかし、私ははじめての異国の旅で、十七、八の小娘のような無邪気な気分になっていた。世界中の人が私のために存在し、私を祝福してくれているかのようで、またそのような私の気持ちを反映してか、道行く人の視線も親し気でやさしく感じられた——いや、実際にやさしくふるまってくれたのではないかとも思う。その年は例年になく夏が早く来たとのことで、最初に着いたハンブルクでは、木々がそよ風になびき、霧のように舞っているマロニエの花粉に日の光が反射して、街中がまばゆいように輝き、家家の窓や庭に、そして湖畔の公園や街角のレストランの戸外に出したいすの間に、一せいに開いたばかりの春の花がこぼれるように咲いていた。昔、好んで見たウーファーのオペレッタ映画の世界にでも迷いこんだようで、うきうきと着物の袖をなびかせて歩く私の姿に、レストランの椅子から見知らぬ男性が立ちあがっ

て、帽子を胸にあててあいさつを送ってくれたこともあった。しかし、その後何回もハンブルクは訪れたけれど、忙しく人をつきとばすように走り回る車の流ればかり目について、二度とこのような楽しい気分を味わったことがない。

人と人との出会いには、未知のものに対する子どものような新鮮な感受性や、素直なおどろきが必要なように思われる。そのような状況と、そのようなふん囲気に恵まれた時に、日常のすれちがいの人生の中で、はじめて永遠の瞬間として残る出会いが生まれる。そこから長い友情や恋愛の感情が出発することもあるし、ただ一回きりではあるけれども、永遠に思い出の中に残る貴重な時間となることもある。ソェ博士ご夫妻とは、何回も機会があったにもかかわらず、その後はいつも行きちがってお目にかかれなかった。奥様に先立たれた先生はお二人で日本にも来られたということであるけれども、その出会いは私に関するかぎり、その時一回で終わってしまって、先生ご自身も亡くなられた今日、もはや繰りかえすすべもない。しかしその夕刻のひと時が、あやなす運命のよこ糸の一つでもあるかのように、私の人生を導いて、私が今日あることの大きな背景の一つとなった。

それまで仏教学の勉強ばかりしていた私はサンスクリットや漢文の文献の中に埋もれて、とても哲学書などひもとく暇もなく、浅学にもキェルケゴールがデンマークの人であったことを知らなかったし、またデンマークにはキェルケゴール協会があり、その会長がソェ博士であることなどはまったく知らなかった。かわいいお城、玩具のような兵隊、人魚の像、アンデルセンのお伽話のさし絵のようなティヴォリ公園などを楽しく見て歩いた後で、急にコペンハーゲン大学でのソェ博士の講演の通訳を頼まれた時には、そんなわけですっかりあわててしまって、とても任ではないからと何度もお断わりしたけれども、他に適当な人もみつからずに、そのままやらせられる羽目となり、それが最初にソェ博士とお目にかかるきっかけとなった。専門の術語もわからずに、その時聞いていられた日本の宗教団体の学者や偉いお坊様たちの前で、冷汗をかきながらそれでもなんとかできるだけ忠実に先生のお言葉を伝えようと必死になっていた私をごらんになって、多分先生は気の毒に思われたに違いない。講演の後で「ご苦労でした。暇があったら家に遊びにいらっしゃい。家内も喜ぶでしょう」となにげなく一言、なぐさめの言葉を下さった。そして外国の偉い学者にはじめて声をかけられて感激した私は、そのまま先生のお言葉に甘えて、その翌日にソェ家の門前に立つようなことになったわけである。

静かなものごしの、知的で不思議なほど落着いた感じの中年の

婦人が私を迎え入れて下さったが、先生はこの奥様とお二人だけのご生活のようであった。通された居間には、今では日本にもたくさん輸入されてそれほど珍しくはなくなった白木のがっしりした家具がおかれ、八時をまわっていたけれども、部屋中に夕方の明るく柔らかい光線が満ちていた。お手製のスープと北欧特有のパンの上に肉や卵やサラダをのせた、さりげない日常的なもてなしで、窓の外の空はいくらか藍がかったままいつまでたっても暗くならず、私は時のたつのがとまったかのように、すっかりくつろいでしまった。話題はソエ夫人が中心となり、しきりに仏教や禅について質問されたので、どのような学問的な背景をもつ人かと、いぶかしくも思ったが、実は、そのソエ夫人こそ、北欧では数少ないユング派の精神分析医として活躍していられる方だった。

今から考えると、毎日読書三昧で暮らされているのかと思うほど、広汎な知識をもたれ、その上に病院で臨床的な仕事もされて、さらに著書までおありになるソエ夫人が、どのようにして静かな夕食のひと時をもつ余裕を作られるのか不思議でならない。C・G・ユングの名前はもちろん日本でも知られていたし、スイスのチューリヒにあるユング研究所については、ユングが仏教に関心を示していたこともあって、私も機会があれば訪れてみようと思うくらいの知識はあった。

「チューリヒには必ず寄ってごらんなさい。あなたはおそらくユングを理解するでしょう。そしてユングもあなたを理解することでしょう」そういって、既に三年も前に亡くなっていたユング自身が、生きてでもいるかのような口調で、遠く故郷を思う人のように、遙かなところにまなざしを向けたソエ夫人の表情は今でも忘れられない。しかし、その時の私はまだソエ夫人のまなざしの意味するものを知らなかったし、ソエ夫人の言葉も意識をかすかにかすめただけで、それほど気にもとめなかった。

食事を終わって、隣の居間に案内され、私はいくらか調子にのって、コーフィーを片手に舌足らずの外国語で、まだしきりに仏教の説明をしていた。背理的な背景の中で洗練された教義を築きあげてきた大乗仏教の説明は私には誇らしいものであった。その時まであまり言葉もはさまずに真剣に聞いて下さっていたソエ博士が、不意にソファーによりかかっていた私の前に仁王立ちになって、「私が考えていることが君にわかるか、君たち仏教徒にはわれわれキリスト者のこの気持ちがわかるだろうか、あの十字架のキリストの前で、すべてを投げうってぬかずくこの気持ちが。君の説明はたしかに見事で美しい。君たちの仏像はいつも静かにほほえんでいる。そして仏の教えを説く君の顔にもほほえみが浮

かんでいる。それは仮面なのか、その裏には一体なにがあるのだ。君の自信とそのほほえみはどこからくるのだ。君にはおそらくあの姿は見えないだろうね。あの原罪を背負ってはりつけになられた神の子のお姿が」と叫んだ。そして後をふりかえり正面の壁をさした。私はその時はじめて私の目の前の壁に十字架のキリスト像が飾られているのに気がついた。博士はそのまま十字架の前に進んで、その前に深くひざまずいた。やがてふと普段の調子に戻り、立ち上がると私を見て「君を改宗させたいと思う。本当に思う。しかしもちろん、君は改宗など絶対にしないだろうけれどね」といってかすかに首をふられた。私はその間どうすることもできなかった。ただ明らかに先生をいらいらさせて、激情を引きだしたと思われるほほえみを続けるだけであった。長いすによりかかったまま、じっと静かにほほえんで、先生の激しい動作を見守っているより他はなかった。私たちの間には激しく反発しあうものと同時におそろしくひき合うものがあった。そして私は生まれてはじめてキリスト教という私にとって異質の宗教のもつなまなましさときらめきに一瞬ふれたように思った。ソエ夫人はコーフィーのおかわりと果物をもって食堂の方から入って来られたが、お盆をもったまま静かに立ちどまって、向かい合ったまま見つめ合っている私たちを見守っていられた。

夜半近くやっと夜空に星がまたたきだすころになっておいとますることになった。「こんな方々がうちに見えられましたよ。どうぞあなたも何か記念にお書きになって下さい」と差し出された訪問帳には、つい最近にしばらく滞在されていたというカール・バルト博士のご署名があった。そのころの私はバルト博士が有名な方であることは知っていたが、神との『断絶』の上にたつバルト神学についてはほとんど何も知ることがなかった。そして無邪気にも、まったく無邪気にも、そのすぐ下に私の名前を書き、「尽十方世界是一顆明珠」という道元禅師のお言葉を写した。

その後私はまったくの偶然から、チューリヒのユング研究所に籍を置き、結局そこで約四年間の留学期間を過ごして、チューリヒは私の第二の故郷となった。その間私の念頭を離れなかったものは、東洋と西洋という異質の文化とその背景にある宗教の比較研究であり、現在もその道を歩いている。偶然にもと書いたけれども、これはしかし正確な表現ではないかもしれない。それは私の無意識の中で準備されていた道であり、それがこのような出会いを生みだし、それらの出会いの重なりによって私は今日を生きているのかもしれない。出会い、それは一つの神秘であると思う。

（大正大学）

「受け入れるということ」を考える

―「母なる館グリーン・ノウの物語」を媒介として―

本田和子

四月は、スタートの季節である。新しい子どもたちが、幼稚園の門をくぐる。一人々々がそれぞれに自分の歴史を背負い、自分の世界をもった子どもたち。四月の保育者の関心は、この子たちとどのようにして出会い、この子たちをどのように受け入れていくかという、その一点に集中するといえよう。

四月の保育雑誌を賑わすのも、この入園期の問題である。子どもたちがいかにして園の生活に入りこんでいくかが考察され、保育者の受け入れ方がさまざまに論じられるのである。

ところで、子どもが新しい場に「入る」ということ、そして、それを「受け入れる」ということは、単に入園期だけの問題に限らないのではないか。毎日の生活の中でも、子どもたちの前に、「入る」ときは、常に訪れる。たとえば、新しいグループに「入る」、遊びに「入る」、あるいは新しい成長の段階に自ら「入る」瞬間もあるにちがいない。

子どもは、というより人間は、常に「入る」という課題をかかえているし、同時に、「入ろう」とするものを、「受け入れる」という課題をかかえていると言えないだろうか。

ここでは、一つの児童文学作品を媒介としながら、「受け入れる」ということを考えみようと思う。

◆　◆　◆　◆

「グリーン・ノウ物語」は、英国の児童文学作家、L・M・ボストンによって、一九五四～一九六四にかけて発表された。「グリーン・ノウ」とよばれる神秘的な館（やかた）をめぐって生起するさまざまな事件や、冒険を描いたファンタジックな作

品である。

「グリーン・ノウ」は、九〇〇年以上も昔から存在し続けている古い館であった。館の主人は、オールドノウ夫人という年齢もわからぬほどに年老いた一人の女性である。この館にはさまざまな不思議が息づき、この夫人はさまざまな神秘を日常としている。

さて、「グリーン・ノウの子どもたち」と題された第一作では、ある年の冬、クリスマス休暇をすごしに、曽孫のトーリーがこの館を訪れる。トーリーの家族は遠くビルマに住んでいるため、彼だけが英国で寄宿生活を送っている。少年が帰省するには、ビルマはあまりにも遠方である。トーリーの休暇はいつも淋しかった。しかも、彼は実母を早く失っていた。継母も悪い人ではないが、少年の孤独を真にいやしてはくれない。

ところで、今度は、大おばあさんのオールドノウ夫人からの招待を受けたのである。大おばあさんは「グリーン・ノウ、あるいはグリーン・ノア」とよばれる古い館に一人で住んでいる老婦人である。トーリーは、好奇心と期待と、そして、少なからぬ不安をいだきつつ、この館にたどりついたのであった。

トーリーは、ここで、さまざまな不思議を体験した。何よりも、「まぼろしの子どもたち」すなわち、三〇〇年も前にこの館の住人であった三人の子どもたちと友人になり、楽しいクリスマスを送ることができた。

すべてのものを、「各々そのあるがままの姿で」包みこんでいる古い館は、トーリーの眼前に「不可視の現実」を出現させてくれたのである。

第三作「グリーン・ノウの川」では、両親や家族とちりぢりになった難民の子どもたちが、グリーン・ノウで体験する夏の冒険が物語られる。

第四作「グリーン・ノウのお客様」は、やはり、グリーン・ノウに招かれて休暇をすごしにきていた中国人の孤児ピンが、動物園を脱走したゴリラのハンノーと出会い、親子の情にも比されるような堅い友情に結ばれて、「本ものの三日間」を過ごす物語である。作者ボストンはこの第四作で、英国児童文学の最高の栄誉たるカーネギー賞を受賞している。

グリーン・ノウにおいて、現代を生きる一人の少年が、三〇〇年という時間のへだたりを超えて、過去の子どもたちと出会うことができた。また、国籍も生い立ちも異なった難民の子どもたちが一体となって一夏を楽しみ、さらに、人間と

動物という種のちがいを超えて、ゴリラと真の友情を結ぶことも可能だった。

この館は、「今」と「今でないもの」を出会わせ、「さまざまな異なった人」を一体とし、「人間」と「人間でないもの」結びつけた。そして、それらすべてのものに真の安らぎを与える「永遠の和らぎの地」なのである。

作品中のことばを借りれば、グリーン・ノウは、「誰もここではよそものなんて思えない場所」であり、「本当の逃げ込み場所」なのである。女主人のオールドノウ夫人は、「ここでくらしたいと思うものには、自由にそうさせてやりたい」と断言している。グリーン・ノウの館は、すべてのものを「受け入れ」「つつみ込む」まさに、大いなる「母のふところ」なのだ。

そこで、このシンボリックな古い館「グリーン・ノウ」と、その聖性を代表する「オールドノウ夫人」とが、訪れるものをいかに「受け入れ」それらの人やものをいかに「和らがせるか」というそこに焦点を当てて、若干の考察を試みてみよう。

グリーン・ノウの館に関して、作品中に次のような説明がなされている。

――トーリーにとっても、ピンにとっても、今ではここそが家だった。そして世界じゅうでいちばんすばらしい場所だった。ほかのどことも違っていた。なぜなら、たいていの家は、住んでいる人いがいは何もかもしめ出してしまい、ドアやカーテンをとざして、野原のはてから吹いてくる冷たい風も近所の人のものめずらしそうな目つきも同じようにびしゃりとさえぎり、すべてをじぶんたちだけでひとりじめして、ぬくぬくとくるまつてくらすようにできている。ところが、グリーン・ノウはふしぎなことでいっぱいなのだ。ここはだれでもうけいれる。そしてここちよく楽しく、生き生きしている。だが、それだけではない。この古い建物の心はずむような形と色のうしろには、見知らぬ世界からの驚異がひそんでいるような気がする。この家はその見知らぬ世界とも仲よくし、りくつではわからないものだつてけっしてしめ出そうとしていないようだ。――「グリーン・ノウの魔女」より

館は、合理的な判断だけですべてを処理しようとはしない。よくわからないものも、「わからないなりに」存在することを許す大きさを持っている。オールドノウ夫人の言葉にも、次のようなものがある。

――「こういう古い家では、いろんなことがよくわかつていると同時に、わからないこともあるんです」――「グリーン・ノウの魔女」より。

この館は、トーリーにとってもピンにとっても、その他の子どもたちにとっても、この上なく魅力的な場所であった。外から見た家の形そのものも、子どもたちの心をひきつけた。それは、この上なく簡素でありながら、しかも変化に富み、四面がそれぞれ違った形をもちながら調和があった。グリーン・ノウの家は、「この世に生きてものごとを知るということの真実の意味あいを、一点に集め、あたりに示している」のである。子どもたちがこの家を気に入り、この家を訪れることをうれしく思う気持ちの源には、こうした理解が漠然とではあるが、あったのである。

古い伝説めいたこの家には、「昇る太陽や沈む夕日、おとずれる月や去っていく月、さらには屋敷の上空をわたる傾いた星座などから、やさしさとうっとりするこころとがしたたり落ちて、しみこんでいる」のだった。

グリーン・ノウの館の中には、たくさんのものがおかれていた。建物と共に歴史を生き抜いてきたような古いものもあれば、夫人の蒐集になる洋の東西の珍しいものなど、さまざまであった。日本の細工物もあれば、中国の調度品もあった。中には、一体、それが何なのか、何の役に立つのか、すぐにはわからないようなものも、たくさん、まじっていた。

――家の中はぶう変わりなものでいっぱいだった。旅行家の家はいつもこうなのだ。オールドノウ夫人自身のコレクションは主として絵と庭の鳥の巣であった。だがこの人は、家に「ふさわしい」と思ったり、家の中を豊かにすると思ったものはどんどん集めた。じぶんが好きだからというだけでなにか買うようなことはけっしてなかったが、ほんとうの家庭にひきとってやることになると思うものは大いに集めた。――「グリーン・ノウの魔女」より

それらの、一見、雑然とみえる蒐集物が、あるとき、ある人と出会って、いきいきと生命を持ち始めることがある。難民収容所に収容されていた中国人の孤児ピンを迎えたのは、大きな中国製のちょうちんであり、中国製の陶器だった。ピンは、その陶器の茶わんに、失った「母の面影」を見いだして驚く。

――それは薄い水色の茶わんだった。持つところはなく米つぶくらいの大きさの、うわぐすりのかかった卵形の窓がついていた。持ちあげると、その窓から光がもれて出た。「はじめのうちはただふしぎな、幸せな気がしただけで、なぜだかわかりませんでした。でも、今やっとわかったんです。ぼくがまだ小さかったころ、お母さんがこんな茶わんを持ってました。夢ではないんですね」

ピンは手をのばしてその陶器にさわってみた。

――「グリーン・ノウのお客様」より

オールドノウ夫人は、次のように答える。

――「この家なのよ。いつもまるで偶然みたいだけど。でもたとえば、とつぜんこうしてあなたがやってくるでしょう。そうしてなんでもいいから見ていると、それがみんなあなたを、だれでもなくあなたを、待っていたように思えてくる。ほかにもそういうものがたくさんあるはずよ。この茶わんだってごくあたりまえの中国の茶わんです。中国のだということは窓飾りがついてるからだれでもわかる。けど、あなたにとっては、お母さんの茶わんになるんですよ」――「グリーン・ノウのお客様」より

ピンを歓迎するためにつるしてあった中国のちょうちんは、彼のそばにあって、一きわ落ちついた光をはなち、竹やぶの竹は、ピンがそこに立ったことによって、「本当に竹らしく」見え始める。

グリーン・ノウの館におかれたさまざまな「もの」は、平常は、誰のためにあるのか、何のために役立つのか、わからないような無駄な蒐集物に見える。しかし、誰か新しい人がこの館を訪れたとき、それらさまざまな「もの」のどれかがその人を迎え、訪れた人はそこに「わが家」を感じるのである。そしてまた、「もの」もはじめて真の主人を得て、いきいきとその真価を発揮するのである。

それゆえに、訪れた人はその家に大きな「安らぎ」を感じた。

――家にはいると、玄関はたのしくみんなをつつんで、ほっとさせてくれた。そこはいつものように花や鳥の巣でいっぱいで、電燈の明かりが鏡一面にうつり、それがつぎつぎと反射していた。テーブルの上には、植木ばさみや、かごや、本や、手紙など、ひょいとおいておけるもの、楽しいくらしの品じながいっぱいにちらかっていた。そして色ぬりの階段が「さあどうぞ」とでもいうように上へのびていた。――「グリーン・ノウの魔女」より

この古い館にあって、異なったさまざまなものが、それぞれ「あるがままの姿」で存在していた。東洋のものは東洋の姿のままに、魔法の跳梁していた時代のものはそのままに魔力を秘めて、それぞれにおかれていた。そして、一つ一つが「あるがままの姿」を許されていたからこそ、その本来の生命を失なうことなく、長い時代をいきいきと存在し続けて、いつか訪れるであろうおのれの主人を待ち受けていたのである。

そして、それらを「そのままに」抱き包んでいたのは、い

うまでもなく、館の女主人オールドノウ夫人であった。

——いいえ。わたしはなにもかもそっとそのままにしてきてるの。どんなものでも、そこにあるままで、りっぱにお役目をはたしているのよ」——「グリーン・ノウの魔女」より

◆　◆　◆　◆

オールドノウ夫人は、「どんな変わったことがおこっても静かに受け入れることができる」人だった。動物園を逃げ出したゴリラのハンノーですら、夫人の気持ちとしては、こばみたくないのである。「もし、ここにゴリラが逃げこんできたら」というピンの問いに、夫人は次のように答えている。

——「そうね、もしハンノーがここにいることが気に入って、だれにもいたずらしないようだったら、わたしはできるだけ長くおいてあげたいと思うくらいですよ」——「グリーン・ノウのお客様」より

トーリーがはじめてこの館を訪れた夜、夫人は、窓という窓にはぜんぶあかりをともし、室内のろうそく立てにもいっぱいに火をともして、彼を迎え入れた。

——へやには、たくさんのガラスのろうそく立てに、ろうそくがいっぱいともされていた。そして大おばあさんがトーズランドに手をさしだしたとき、指輪にもろうそくの光がうつった。

「とうとう、かえってきたわね」

大おばあさんは、少年が前にすすむと、ほほえんでいた。と、トーズランドは、知らぬまに大おばあさんの肩にもたれかかっていた。なんだか大おばあさんをまえからよく知っているような気がした。——「グリーン・ノウの子どもたち」より

暖炉の中には丸太のまきがくべられ、ほのおがゆらゆらあがっていた。

——トーリーはいった。

「これぼくたちの火ですか？　あのう、つまり、ぼくたち二人の？」

「青い火があなたので、オレンジ色のがわたしのよ」

「ろうそくの火は？」

「みんな、あなたのもの」

トーリーは、ちょっとためらってから、とても小さな声でたずねた。いいだす勇気がなかったのだ。

「ここは、ぼくの家ですか？　いくらかでも」

——「グリーン・ノウの子どもたち」より

長い旅を経て、はじめての土地を訪れた少年は、老夫人のともした火と、笑顔と、「かえってきたのね」という言葉に迎えられて、この館を「わがもの」と感じたのであった。

ピンが夫人とはじめて会う場面は、次のようである。

——だが、小がらな年とった婦人が、待ってたわよと言うように、こまかなしわを元気よく動かしながらドアを開けたとき、ピンはとっさに思ったのだった。このひと、中国のおばあさんのようだ。そしてたちまちくつろいだ気分になった。——「グリーン・ノウのお客様」より

グリーン・ノウの館は、すべてのものを包みこみ、和らがせる「母のふところ」であった。石で囲われた安全な地、すべてのものが、そこでは真実に自分らしく生きることのできる「聖地」である。しかし、その館を訪れる人をまず抱きとめ、安らぎを感じさせるのは、この老夫人の存在であった。オールドノウ夫人は、まさに「母なる館」を代表する「大いなる母」なのである。

老夫人は、先にも触れたように、すべてのものが「そのままに」存在し得ることを第一としていた。したがって、子どもは子どもとして、「子どもの思いのままに」行為し得ることを大切と考える。グリーン・ノウが魔女に襲われて危機におちいったとき、夫人は子どもたちに次のように言っている。

——「なんでもいいから子どもらしい遊びをして、知恵をみがいておきなさい。あとからそれが必要になると思いますからね」

——「グリーン・ノウの魔女」より

夫人は、「ものごとはその人の考えにしたがって起こるものだと信じて」いた。そして、子どもの考え方を愛していた。なぜなら、子どもにとっては、世界中はすべて驚異と神秘に満ちていて、つまらないことなど起こり得ない。したがって、子どもが滞在するとき、この館には新鮮で驚きに満ちたことがらが起こるのが常であったから。

館の中に「何か」が起こるとき、夫人はいつも子どもらと感動を共にしようとした。ときには、大人の良識がわざわいして、完全な共感が成立しないこともあったが、それはやむを得ないだろう。ひとたび、子どもらの提案を受け入れ、行動を共にしようとするとき、夫人のふるまい方はみごとであった。トーリーよりもピンよりも子どもらしいといえるくらいに、活気があり、エネルギーに満ちていた。

——「さあ。わたしは生まれてから棒でものをたたいたことなんて一度もないわ。こっぴどくたたいてやりたいものですね」

じっさい、夫人はだれにもまけず強くたたいたし、おまけに正確だった——「グリーン・ノウの魔女」より

オールドノウ夫人は、「あたたかく受け入れ、抱き包む母」

であった。しかし、その「母」は、単にほおに微笑を浮かべ、腕を広げて待ってだけいる人ではなかった。子どもと一緒に棒をふるい、サンドウイッチをほおばり、まぼろしの子どもたちとたわむれることのできる人であった。

夫人が不在のとき、グリーン・ノウの館はかりの住居となる。女主人が帰ってくると、館は、子どもらにとって「本ものの家」となった。

グリーン・ノウは、それ自体「母のイメージ」でとらえられる場所である。しかし、オールドノウ夫人の存在があってはじめて、その「母性」は完成されるのである。

◆　◆　◆　◆

さて、私どもは、今、「グリーン・ノウの物語」というファンタジックな世界を、のぞき見ることを試みている。人もものも、すべてにとって「本ものの家」と感じられる場所がそこにはあった。このシンボリックな物語から、私どもが学びとれるものは決して少なくはないと思う。

（お茶の水女子大学）

☆グリーン・ノウ物語

L・ボストン　亀井俊介訳　評論社発行

日本保育学会第27回大会のお知らせ

日程・会場

五月十八日（土）

一〇・〇〇　シンポジウム、島根県民会館

一四・〇〇　研究発表、島根大学

五月十九日（日）

九・三〇　研究発表、島根大学

一五・〇〇　公開講演、島根県民会館

参加

だれでも参加できます。（当日会場で参加費八〇〇円を納める）

プログラム

当日会場で入手できます。事前に入手したい場合は印刷実費と送料一五〇円（切手可）をそえて、左記へ申し込んで下さい。

松江市西川津町・島根大学教育学部　幼年期教育研究室内

日本保育学会27回大会準備委員会

出会い―新米先生と三十三人の子どもと―

梅田　宣子

きょうはこの子がこんなことを言って私を笑わせてくれた。そうそう、あの子が仮面ライダーではない絵をかいたのも、きょうが初めてだった。などと言っているうちに、いつのまにやら一年がたってしまった。毎日の仕事はどうつめこんでみても勤務時間内には終わりそうになかったし、行事が終わってやれやれと思っているまに、もう、次の予定が迫ってくる。「ああ、忙しい、忙しい」とつぶやいているうちに過ぎ去ったこの十二ヵ月の、なんと早かったことか。

たった五年しか人間をやっていないのに、もうりっぱにその子らしさを備えている子どもを三十三人もあずかることになったから、さあ、たいへん。子どもだけではなく、その後ろには、母親というたいへん気になる存在がそびえ立っていた。もっとも、母親との「つき合い」のむずかしさに気づいたのは、ちょっとたってからだったけれど。

子どもたちと初めて会った日のことをふりかえっていると、思い出し笑いがうかんできてしまう。彼らは、まず、私の顔をまじまじと見つめた。そして曰く、「先生もみずぼうそうなんだね」。思いがけない発言によって、「こんどきた先生」は初対面のあいさつもそこそこに、「みずぼうそうのブツブツと、にきびあとのテンテンは違うもの」と教えることになってしまってしまった。みんな、半年ぐらいはにきびの観察にこっていて、ふえただの減っただの、はてまた、「ぼくのみずぼうそうはツルツルになったのに、先生のにきびはしつこいねえ」などと騒がしかった。

気ままな学生時代と、三十三人の子どもがよりかかっていて、そうそう自分勝手にはとびはねられなくなった日々との差は、大きかった。体がなかなか慣れず、そういえば、一学期はかぜばかりひいていた。

今でこそ、楽しい仕事です、と背筋をシャンと伸ばして言えるけれど、初めのうちは、「ああ、まだ降園まで二時間もあるなんて。それに、卒園までには十一ヵ月と五日。フゥーッ」といった

ありさまだった。のどの奥につばがちっともゆきわたらないような、ヒリヒリカサカサした感じとか、腰をまわすとギシギシッと骨がきしむかのような感覚などは、今でも忘れられない。

子どもたちと顔を合わせて以来、毎日毎日、失敗の連続だった。

全員を集めて、さあ、みんなでゲームをしようということになった時、一人の子がトイレに行きたいと言いだした。すると他の子もわれもわれもとつられて行ってしまい、ポツンととり残されたり。まったく、集合前に、一声かけなかったばっかりに。また、シャベルの置き場所が知りたくて「言ってちょうだい」と頼んだら、子どもは「行ってあげよう」と考えて、部屋からころがり出て行ってしまったり。

マットの上をゴロゴロさせる時にも、ポケットの危険物（子どものポケットって、ほんとうに、信じがたいものがはいっている。石ころやバッタから、朝食のトマト、おやつのビスケット等等）を出させることに気づかず、後で、とんだペチャンコ宝物がころがり出てきたり。

牽牛・織女のロマンスを語っている最中でも、「それ、おじいちゃんに聞いたよ。おじいちゃん、何でも知ってるんだ。でも、歯はないの。先生、先生、入れ歯、見たことある？」と話し出す。それに、生活発表などでうっかり女の子を三人続けて指名したようものなら、「ちぇっ、先生は女だから、女の味方なんだ」と男の子にヤジられる。こうした、瞬間的連想とかヤジとかいったものの、どれをとりあげ、どれを無視すべきかがつかめず、ずいぶん話がシリキレトンボになってしまった。今もってそうで、ついうっかりと子どもの発言にひきずられては、失敗している。

教師としての経験も技術のもちあわせも乏しく、ずいぶんあせったけれど、結局、子どもにぶつかって、子どもの反応をみながら、ぎっくしゃっくと進むほかはなかった。泣いたり笑ったり、それすらおっくうなほど疲れはてたりした日々を思い返してみると、不器用ながら、思い出深い毎日だった。

「先生、生きるってね、育つってことなんだって」ある子がフッと口にしたこの一言、園庭のいちょうの緑が目に快いころのことだったが、今だに耳の底で響いている。あの子にとっては、どこかで聞いてきたことを、そのまま言っただけだろうけれど。

ところで、子どもも私もこの日本で生きている以上、単に五歳児と新任教師が出会ったというだけでなく、当然、昭和四十八年という時代が保育にもあらわれているはずだ。

夏休み前のことだった。水や教材の使い方に、なんとしても無駄がめだった。たった五歳の子なんだからとも思ったけれど、ど

うやら不満げな言葉をもらしていたらしい。

「もう。先生ったら、すぐもったいないっていうんだから。うちのおばあちゃんみたいだ」と言われてしまった。

それは、ついこの間まで私が昭和ヒトケタの母に向かって、言っていたことじゃないか……とニタリとしてしまったが、最近のこの物不足騒ぎ、日本中で「もったいない」の声が響き出して、私もたいへんやりやすくなった。それにしても、この一年のうちに、画用紙も折り紙も薄くなったこと。このような世の中、幼稚園もたいへん。

高層住宅の「上の方」に住んでいて、帰宅してドアをしめたら、もうその日は家の中でしか遊べない、という子も幾人かいた。そうでなくても東京のまん中のこと、外でとびはねられる子は少なく、そういうことも園での遊びに反映してきている。

私の学生時代は安保だ、学費値上げ反対だなどと、構内がたいへん騒がしかった。それに比べて、幼稚園は何と静かなことか。先生と子どもの親密な心のつながりに、ホッとするものを覚えずにはいられなかった。なにかにつけて、人の話を聞きましょう、と強調してきたのは、大学紛争の中で、言いたいことだけ言って人の話は聞かないというタイプの人間を見すぎてきてしまったからかもしれない。

こうして一年間、「先生」と呼ばれ、指導する立場に押し上げられはしたけれど、学ばせてもらったのは、実は私の方だったと思う。

たとえば、しゃべること。語いは私の方がはるかに豊かだけれど、五歳児の前で話すのは、なんと舌がもつれたことか。おとな同士だと、理解できていなくても、感動していなくても、むずかしい言葉を使うことによってごまかせる。ところが平易な言葉の組み合わせとなると、そうはいかない。「しゃべること」の厳しさを思い知らされたこともたびたびだった。それから「ありがとう」を言える子になってほしいと考え、そのために私もそういう生活をしようと思いたったのだが、そうしてみると、一日に何度も何度もこの言葉を口にすることになった。今さらながら、私一人だけの力で生きているのではないと、考えさせられた。

夢中ですごしてきた一年、一生懸命やってできないのならとか、こんなに人数が多くては、といったことに甘えてしまった面もあった。体の方はつらかったけれど、子どもに接することはいつも心楽しかった。

二度めの四月がやってくる。さて、これからの十二ヵ月にはどんな事件がまっているだろうか。

（大和郷幼稚園）

篤志のある一日

平井和貴子

暮もおし迫った小春日よりの朝、近所の保育園から電話がありました。「今日はお餅つきですが、先生はご診察でお忙しいでしょうね。一日、ついていただきたいのですが……。あっちゃんもぜひいらして下さい」。

日ごろ、篤志の身体と生活に理解をお持ちの園長先生から親しいお誘いの言葉に、大喜びでさっそく篤志に靴をはかせて……これも大仕事……　出かけて行きました。いつもは門前で「ここはあっちゃんの幼稚園ではないのよ」と言い含められて、門のさくをかたかたゆすぶりながら中のお友だちが遊び回るのを眺めていたのに、今日だけは許されて中に入れたことをどう受けとめたのか、手をぐいぐいと引っ張って前のめりに広場の真中にすえられた臼の方へ進む右手の力の強いこと！　そこではもうお手伝いの父兄の手で、あらかたつき上がったまっ白のお餅を、今度は小さな杵で園児たちが代りばんこにペッタンペッタン。ここの運動場は土でしたが、その柔らかい土の上にかまどをしつらえ、古びた釜のふたから湯気がふきこぼれているのをみた時、なつかしさとうれしさ、そして皆さんの善意が胸に迫って、煙が目にしみました。

元気な園児にまじって、篤志も片手で杵を持ち上げ、萎え

た左手は私がささえて、皆と同じにペッタンペッタン。きき腕の右手だけは人一倍力強く、大工さんのように節くれだっています。何回も一生懸命持ち上げて、やる気十分。次の友だちがまちかねているのに、取り上げるのに一苦労でした。お手伝いのおばさんの掛け声、「ホラよ」「ペッタンコ」「よいしょ」「ペッタンコ」のリズムにはすっかり魅入って、思わず「ウフ、ウフ」と声を出して、体中で笑っています。

「あっちゃんも一緒にどうぞ」とつき上がったお餅が、おぞう煮とあんころもち、そしてきな粉とからみになって出されました。一人前をお盆にのせて下さった時は、一瞬とまどって、なかなかじっと食事を続けるのは大変で、うまく食べさせられるかと心配になりました。最近ずっと風邪気味ですっかり食欲をなくし、午前中は一口も物をいただかない今日このごろ、ましてお餅はまだ食べさせたことがないというすべては全く杞憂でした。おぞう煮はペロリ、甘い物は好きでないのに、きな粉まで、本当に何日ぶりかでみる食欲でした。

さて、各自さっさとすませて、よごれた食器はちゃんと部屋のすみに片付けた同じ年ごろの子どもたちにとって、親にかかえられるようにして一口一口、手まで添えられ食べさせられている。半身マヒの子どもの食事は、何と珍しい光景でしたでしょう。ソロソロ周りに集まった子どもたちの質疑応答が始まりました。「この子どうしたの？」「病気？」「左手ずっとなおらないの？」

そして「平井先生にみてもらったら？」には思わず苦笑。

平井先生、もってめいすべし！

バッと近くに顔をよせてきた子の髪を引っ張ったり、ぐっと足でけってみたり、言葉の出ない篤志にとって、それが仲間入りのごあいさつ。「イテエナア」さすがの番長Y君も、他意のないのがわかるのか、説明いらずで引きさがる。すみでひじつき合わせてのケンカ組も、篤志が「ヤレヤレエ」とばかりの掛け声でいざって中に入っていくと恥ずかしそうにザエンド。篤志にとっては大好きなボクシングのテレビ実演とばかりに張り切ったのに……。

クラスのマスコットの小鳥をみせてくれる子。みかんを半分むいてくれる子。でも何と簡単に仲間入りさせてくれたことでしょう。しかしこれはあくまでお客様扱いで、仲間として共同生活をしていく場合は、もっと問題はいろいろ起こってくるのでしょう。

中に一人、篤志の萎えた左手も、引きずって歩く左足にも何の関心も示さず、ぎゅっと引っ張られても平然として付き

合ってくれた女の子、それは篤志と施設でお友だちの「まあちゃん」の妹さんでした。小さい時から兄を見慣れていること、そして生活を共にするうちに自然にはぐくまれた理解と思いやりが、幼い彼女の身についたのでしょう。こんな彼女たちが成長した時代なら、当然の権利として、普通児と同じように、法律に守られながら社会全体の理解と愛情に恵まれた生活を送れるのではないでしょうか。

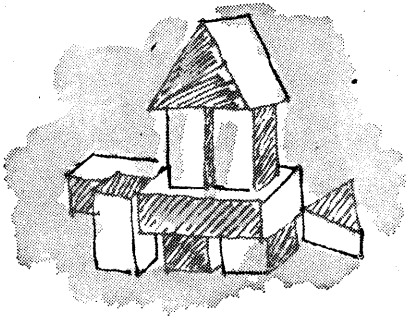
看護婦さん、園長先生たちに暖かく見守られながらお別れした門前で、すれちがったお友だちの一人が、お迎えの母親に「ねェママあの子どうして……」と何か報告しているようす。どうぞ、いい機会なのですからうまく話合いを発展させてほしいと願いながら、篤志の手を握りしめて道角を曲がりました。

平井篤志ちゃん。昭和四十二年十二月二十九日生まれ、出生後間もなく髄膜炎をわずらい、その後遺症で左上下肢麻痺の状態で現在六歳になりました。小児科医を父にもちながら、その昭和四十二年という年は流感のはやった時でもあって、開業医は非常に忙しく、皮肉な結果になってしまいました。

今日まで、板橋整肢養護園で治療をうけながら、両親、二人の兄、祖母、そして理解のある人々に見守られて成長し、考えようによっては恵まれたケースといえるかもしれません。

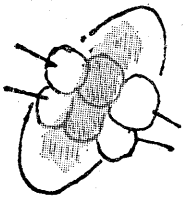
今度、豊島区で〝区立千川子どもの家〟という身障児施設が開設され、現在では、一週間に二、三日そこへ通って集団生活を経験しています。

（編集部）



子どもをもっている親と音楽

徳丸吉彦



まず、わが家の紹介から。子どもは、男の子が一人。今年の五月で満六歳になり、目下、一クラス六十人編成の近所の大幼稚園に通園。趣味は泥いじり、自転車乗り、ミニ・カーとレゴ。彼の好きな音楽は、現代音楽とビートルズとアグネス・チャン。妻はピアニスト。小生の好きな音楽は三味線音楽。

このような家庭生活の経験から、そして、わが家に遊びにくる音楽家や音楽家でない友人との会話から、そして、何人もの子どもを観察した経験から、幼児と音楽について考えていることを、親への注文の形で、申し述べさせていただく。

☆子どもに音楽を習わすより親が習うべし

現在の親の世代でも、かなり厳しい時代に育ってきているはずである。ピアノは高かっただけでなく、気楽に習える環境ではなかったはずだ。また、おじいさんやおばあさんの時代とも違って、邦楽の習いやすい環境でもなかったはずだ。

「子どもにピアノを習わせたくて……」という母親、あるいは、娘のレッスンについてくる母親は、ほとんどが、ピアノをひけない。ピアノを習わせたいと思うからには、ピアノをいいものと考えているのだろう。それだったら、なぜ自分が習わないのか。これが現代の最大のナンセンスである。厳しい経済条件の中で、一人分しかレッスン料が払えないなら、今まで悪い条件を我慢してきた親にこそ、まず習う権利はある。子どもたちは、習いたければ、もっと後でやれ、というわけである。

こうして、親たち（父親も含めて）が好きな音楽を子ども

をおしのけてやり始めたときに、幼児と音楽の関係は正しいものとなるのである。こう主張する私には、二つの理由がある。第一の理由は、「聴くこと」の重視につながり、第二の理由は「知的好奇心の育成」に関係する。

☆子どもがよく練習するからといって喜ぶべからず

多くの親の誤りは、第一の理由とかかわっている。音楽教育といえば、演奏教育だと思いこんでいる人がなんと多いことか。音楽がわかるとは、音による構造が（無意識的にでも、あるいは音楽用語をまったく知らなくても）とらえられることである。そして、作品と作品との関係がとらえられることでもある。これは聴いてわかることである。だから、聴くことは、音楽教育の出発点であり、目的である。ひいたり、歌ったりするのは、聴くためである。

まず、ある曲を耳にして、自分で演奏して、聴いてみたい（もちろん、演奏には運動の楽しみも加わる）と思うのが自然であろう。ひきたいと思うにも、聴いた経験がなく、先生に与えられた曲だけを、だまってひいているだけの子どもが多くなっている。なまじ、早くから教育を受けているので、音楽大学には進学できるので、かえって不幸なぐらいである。この傾向は、ピアノ科に特に目立つ。ベートーヴェンといえば、ピアノ・ソナタだけしか知らないというのは、ピアノソナタもよくわかっていないことになる。そういう大学生の親にならないためにも、子どもたちが聴くことをほめてやってほしい。少なくとも、じゃましないでほしい。

☆親は好きな音楽をやるべし

子どもにとって大切なのは、よい環境を作ってやることである。「よい」環境というと、子どもが音楽を練習しやすいだけでなく、親の暖かい応援を考える人が多いことだろう。冗談じゃない。その逆である。親が好きな音楽をひいたり、聴いたりしていればいいのである。小さな子どもを無理にピアノの前にすわらせるよりは、親が熱心にピアノをひいて、子どもがひかせてくれといってから、楽器にさわらせてもよいではないか。

よい環境とは、刺激が豊富にある環境である。これが創造的な聴き方を生む下地になる。子どものためにレコードをかったり、かけてあげたりするとよい、というと、保育園や幼稚園で慣習的に歌っている音楽をかければよいと思っている人がいる。子どもがあきあきしている歌を、家でもかける必要

はない。違う音楽をかけて、刺激を豊富にするべきなのである。それでは、どんな音楽を、と必ずききかえされるものだ。私の答は、まず親が好きなものを、である。

どんな音楽であれ、親が楽しそうに、あるいは熱心に聴いていれば、子どもたちは、人間とは音楽を聴くものだという、最も根本的なイメージをもつことができるだろう。親が子どもの教育を考えすぎて、いわゆる名作を無理して聴いたりするのはおかしい。音楽以外の面では、親の判断を押しつけているのに、音楽だけ、自分の判断を遠慮するのは、親の功罪を自覚していないことを示している。

☆楽譜の読めない親も自信をもつべし

楽譜、とくに、五線譜が読めないと、つい「私は音楽がわからなくて」といってしまいがちである。楽譜なんか全然知らない人でも、民謡の上手・下手の判断ができる人は多いはずだ。このことからもわかるように、親に必要なのは、楽譜の知識なのではなく、音楽を聴いた経験なのである。

五線譜というものが広く使われているので、あれさえわかれば音楽が正確にとらえられると思っている人がいるが、これこそ大きな誤解である。西洋音楽についても、大体十六世紀までの音楽は、別な楽譜を使用していたし、現代の音楽では、図形によって記譜されることも多いので、ここでも、五線譜だけではどうしようもない。そして、もっと基本的に重要なことは、楽譜が示しうるのは、音の高さと長さとその順序なのであって、本当に音楽らしい部分は、耳と身体で伝承され、あるいは工夫されるものなのである。

昨年、新内節の演奏会で聴いていたら、職人風の中年男が、突然いすから立ちあがり、歯切れのいい口調で、「エエ、こんなものがきいていられるか…」といって出ていってしまった。次の上手な演奏では、また戻ってきて、いい処では掛け声をかけていた。この男は、三味線の譜も五線譜もきっと知らないだろう。しかし、真に音楽的な部分については、的確な判断ができるのである。

親の中には、子どもに聴かせるのは西洋音楽に限ると考えている人たちもいる。自分が西洋音楽が好きなら、それでよい。しかし尺八や長唄をやっている親までが、そう考えたら、これはおかしい。

大体、義務教育で扱われる音楽は、九割までが西洋の十八、九世紀の音楽またはそれをモデルにした作品なのである。中世やルネッサンスの多くの作品も、現代の作品も、ほ

とんど関係ない。アジアやアフリカの音楽もしかり。日本音楽は、多少改善されたとはいえ、鑑賞用に毎年数曲教えられるだけである。

親が自分の好きな曲を聴いていて、それが学校で習うものとかけ離れていたら、結果的にバランスがとれるわけなので、むしろ望ましいことではないか。

☆音楽がよくわかるつもりの親も遠慮せよ

今度に逆に、音楽をよく知っていて好きな親が、かえって子どもを抑圧する場合についてである。

第一の型は、いわゆる西洋クラシック音楽だけが音楽だけだと思っていて、子どもが歌謡曲を聴いてもロックを聴いても反対する親である。歌謡曲だけが大衆の歌だという発想は、非論理的であり、自分たちが音楽産業に管理されていることを知らないおろかさを示している。しかし、歌謡曲を魅力ある音楽の一つと思えば聴くだけであり、これをベートーヴェンから区別するのは趣味の問題でしかない。

第二の型は、子どもには「やさしい」教育用音楽を与えようとする親である。たとえば、西洋の古典的な歌を習う場合には、音程やリズムについて、ある順序が必要なこともある。しかし、音楽作品というのは、複雑な構築物で、親がむずかしいと思っても、子どもの方は同じ作品の別な側面を聴いているかもしれないのである。ベートーヴェンの交響曲の形式感を聴かずに、音色と音量の変化を楽しんでいる幼児もいるのである。自動車の形を少しも覚えられない母親が、パッとみただけで自動車の型や年式をあてられる四歳児たちに、キュービスムの絵はまだむずかしいなどといえるだろうか。

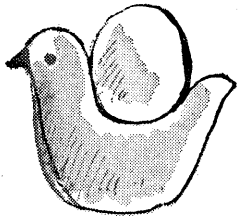
研究はまだ進んではいないが、音楽の知覚についても、自動車の形のようなことがあるように思われる。楽器の音色の識別や歌い方の識別では、音階のけい古のできている大人よりも、幼児の方がすぐれていることだってあるのだ。

これからの親たるもの、自分たちがすでに知っている音楽が、本当にごく限られたものであることを自覚し、また、音楽をイデオロギーで判断することを避け、できるだけ豊かな刺激を準備するようにしたいものである。そのためには、この際、子どもをほっておいても、まず自分の音楽活動を大切にして、十年後に、「親があっても子が育つ」などといわれないようにしようではないか。

（国立音楽大学）

幼児と音楽
〝心から歌う〟

相馬　誠子



時々、私の家に遊びに来る三歳の雅子ちゃんは、音楽が大好きで「レコードかけて」とせがみ、歌ったり、踊ったり、心から楽しんでいる。全く即興である。思い出したように「ピアノが弾きたい」といい出す。楽譜を前に立て、いかにも弾いているような格好をしながら歌ったり、二本の小さな指で、低音から高音まで、たどたどしく音階を弾いたりする。本当に心から音楽を楽しんでいるとは、こういう姿をいうのだろう。私が音楽を好きなことを知っていて必ず誘う。私もいっしょに楽しんでしまう。

こんな時「あら、この子は音楽的素質をもっているから、ピアノを習わせたらのびるのじゃないかしら？」とはや合点をし、ピアニストにでもなるような夢をえがいてしまう人がいるようだ。

ある先生はいう。

「幼児は未分化だから、一本一本の指に、全神経をかたむけて弾くということに、興味のある子どもはとびつくかもしれないが、そうだからといって継続するかどうかはわからない。

「無理に続けさせることによって、音楽をきらいにしてしまうこともある。興味をしめしたからといって、技術をのばす方にあわてるのはどうか」

私は、この言葉を聞いて共感した。音楽は心の表現であり、心から楽しむものであるということが第一に考えられると思う。しかし技術をのばすことによって、表現力が高まり、一層楽しく心を表現することができるのではあるが……。

子どもの発達とか、能力、興味の程度というものをよく考えないで、まるで流行のようにとりいれていくから、まちがった音楽教育になり、音楽ぎらいにしてしまうのである。こういうことについても、指導者としては態度をはっきりもって、他に（親など

に）対することが必要であろう。

例に出した雅子ちゃんのように、心から音楽を楽しんでいるところから、どう育てていくかということが大切な問題である。

音楽が好きになるようにするために、特に、楽しい歌の指導はどうあったらよいかについて考えてみよう。

I　歌いやすくて、楽しい歌をとりあげる

幼稚園でも最近では、リズムや音程のむずかしいと思われる歌を、先生の好みによって子どもに教え、「こんなに歌えるのよ」と自己満足をしている人がいる。幼い子どもだけに、何でも先生の意の通りうけいれるが、その無理のしわよせが心にたまり、明るい楽しい表情が消えていく。上手に歌ったとしても、心はからっぽで、ただ口先で歌っているにすぎない。『幼児の顔』は、指導の評価につながるとも思われる。楽しく積極的に活動するときは、明るく、みたされた柔らかい顔になるし、つまらない時は、生気のない固い顔となることを忘れず、たえず自分を反省していきたい。

最近テレビやレコードを通して聞く歌の中にも、音程が急に上がったり下がったりする歌や、高い音程が続いたり、休止符がたくさんついている歌がある。聞いているのにはおもしろく、ひきつけられるので、子どもたちは繰り返し聞く。聞きながら少しずつ覚え、やがてはいっしょに歌えるようになる。全く自然に覚えていくのである。しかし、中には、音程がとれず、リズムとことばだけで歌っている歌もある。これと反対に、聞きながら覚えるのではなく初めて教える歌としてとりあげる場合は、メロディーもリズムも歌詞も簡単で、三、四回ですぐ楽しんで歌える歌が望ましいと思う。昭和二十七年度の音楽リズム指導書に、幼児の音楽的発達段階に即した基準が、文部省から出されている。音域は六度以上がよいといわれているが、六度の歌は現実に少なく、八度の歌が最も多い。八度でも、歌詞やリズム、メロディーが子どもに魅力あるものであればよいと思う。（例、たき火。ふしぎなポケット、お正月など）好きな歌は、子どもも自分から覚えようとするから……。

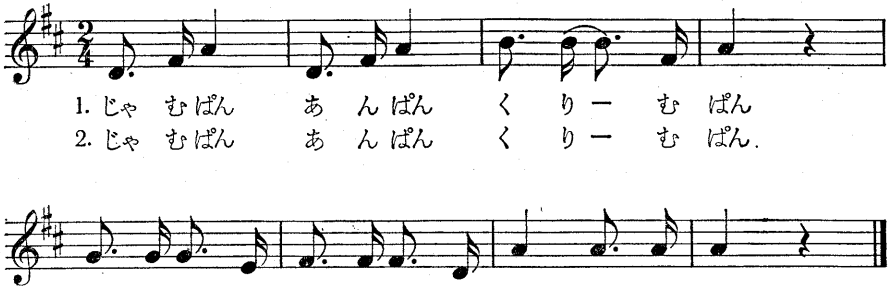
子どもがのってこない歌は無理にしないで、いさぎよくあきらめ、かえた方がよい。

II　心から楽しく歌えるような指導のくふう

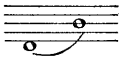
幼児は総合的な活動を楽しむから、絵を見ながら歌ったり、動きながら歌ったり、ペープサートを動かしながら歌うことを喜ぶ。私は四十年前の小学生時代をいつも楽しく思い出す。四十代

ほうかほか

与田準一　作詞
渡辺　茂　作曲



望ましい歌の例　○拍子（2拍子）
○長さ（8拍子）
○音域（6度



○主となるリズム

日本音楽著作権協会承認番号第486190号

の、おじいさんのような音楽の先生だったが、歌う時はいつも心から表現していた。

「さあ、ここはたんぼだ、みんなで田植をしよう」といって先生は『田植』の歌を声高く歌いながら動き出した。私たちもいっしょに教室じゅう田植の動きをしながら、楽しく覚え、心から歌ったことは、忘れられない思い出のひとつである。

ただ、口うつしに教えるのでは、本当の歌の心を感じとることはできないと思う。指導者自ら歌の心に入り切って歌うときに、歌う楽しさは倍加し、心のはいった歌となる。私たちは、子どもに歌わせるのではなく、自ら楽しく歌うとともに、子どもが楽しく歌うにはどのようにしたらよいか、指導のくふうを心がけたい。

Ⅲ　先生自らリズムや音程に気をつけ、ことばをはっきり歌う

子どもは、先生の歌い方をそのまま感じとって歌うものである。発声も、口のあけ方も、リズムもすべて、先生の歌い方によって、子どもの歌い方がきまる。先生が、のどに力を入れて歌っているのに「もっときれいな声で、らくな声で歌いましょう」といっても無理な話である。理くつのわからない時代で、感じとっ

て覚えるものだけに、先生自身が歌うことをマスターしなければ、このねらいは子どもに望めないと思う。

Ⅳ　いつでも歌える環境をつくる

覚える段階でも、また覚えた歌を歌いたい時にも、いつでも歌えるようにするために、カセットに歌を吹きこんで、子どもに自由に歌わせたり、レコードを用意して、歌いたい時にいっしょに歌える環境を作ることは、自発活動を盛んにするためにも大事なことである。

ピアノやオルガンの前に先生が腰かけなければ、歌が始まらないのでは、わく内だけの歌になり、生活化されない。

パンやさんごっこをしながら、「パンの歌」を歌ったり、乗物ごっこをしながら、「はしれ超特急」のレコードに合わせて歌ったり、遠足に出かけながら遠足の歌を歌ったりする時に、歌と生活が自然に結びつき、歌の心が、実感として子どもの心にわきたつのである。

以上のことからも、歌の指導を深く考えていくと、子どもにどうこうと要求する以前に、先生の歌に対する『興味や関心の程度』、『楽しい指導のくふう』、『歌唱表現の能力（らくな発声、リズムや音程の正確さ、詩情を表わして心から歌うなど）』をもういちど見直してみる必要はないだろうか。

いつの時も、先生のすることは大きな環境として子どもに影響していくのである。

（江戸川区立鹿本幼稚園）

……

私は、昨年十二月十六日に「佐藤義美のうた音楽会」という、心あたたまる音楽会にまいりました。童謡として歌っていた時には気づかなかった美しい詩がいっぱいあるのに、今さらのように驚きました。

故佐藤義美さん作詩の歌ばかりの会で、出演者も子どもたちにおなじみの深いタレントばかりでした。ところが私の隣ではとなしくてなきゃだめですよ〃

〃今日はテレビに出てくる人がいっぱい出てくるから、お

〃フーン、じゃあ、ヤシロアキ　でる？〃

〃いいえ〃

〃じゃあ、アンザイマリアは？〃

ああ、テレビ時代！　私は、テレビの歌手のまねをするチビッ子の姿が目にうかびました。そして私たち大人の〃郷愁〃なのでしょうか、歌によっては、涙が出そうになったこの音楽会も、大分客席はさわがしかったのです。

（赤間峰子）

私の保育

―保育者二年生の記―

桑田幸子

何もかもが初めてだった年少組の一年間。子どもたちにとっても、私にとっても。ピンクのスモックを着るのも、皆でお弁当を食べるのも、夏休みも運動会も遠足も、叱るのも叱られるのも、悲しむのも喜ぶのも、幼稚園という、何だかよくわからない世界で、それぞれに初めてのことがたくさんありました。ようやくお互いに構えや遠慮がいらなくなり、一緒にいること、遊ぶことが楽しみになった、そんな子どもたちと、〝おおきいくみ〟になれるのは、私にとって、不安よりも楽しみの方が、ずっと大きいようでした。

四月に、〝ちいさいくみ〟が入園してきました。そして、二十五名の子どもたちと私は、〝ふじ組〟から〝うめ組〟になりました。はしゃいだり、泣きべそをかいたりしている新入園児が、私にはとても小さく見えました。それと同時に、「一年前は、うめ組の子どもたちもこのようだったかしら……」と、子どもたちの成長を感じたり、本当に大切なある時を、うかつに通り過ぎたように感じたりもしました。四月、五月という時期は、子どもたちが、〝おおきいくみ〟になったことを、何よりも肌で感じたようでした。そして、保育者から見ても、子どもたちは、なるほど〝おおきいくみ〟だったのです。

つげの木と女の子

あまり友だち関係が開かれていない女児がいます。どこか活力がなく、気になる一人でした。私と一対一では、よく話しよく遊び、心を開いてくれるのですが、友だちとの関係ではなかなかうまくいきません。そこが気になる私は、彼女と遊びながらも、他の子どもたちも仲間になるようにと、願ったり試みたりしました

が、思うようにはいかないものでした。いつしか、庭の中ほどにあるつげの木が彼女の気に入りの場所になりました。最初は「木に登りたい」と、私の手を借りて登り、下りる時も、私に抱かれて下りていました。何日もそれが繰り返され、一人で（独力で）登れるようになりました。もちろんそれは、彼女にとっても私にとっても、とてもうれしいことでしたが、やはり下りるのには、私の手が必要でした。独力で登れるようになった彼女は、前にもまして、よく木に登るようになりましたが、そのたびに、私はつげの木に、くぎづけになりました。次々に他の子どもたちが「タカオニしよう」「ごちそう食べにきてね」と、私の所へやって来ます。私は一緒に遊ぶように誘ったり、あと少しで木登りはおしまいにするようにしましたが、ある時「下りたくなったら呼ぶから、先生は行ってもいい」と、言い出しました。最初は気になり、こちらから何度も出かけては、「下りたい？」と聞いていましたが、下りたい時は必ず、大声で呼ぶか、近くの人を知らせによこしました。庭の中ほどにあるつげの木にチョコンとすわった彼女は、見ていてのどかで、安心しているようでした。〃友だち関係が開かれていない〃という点ばかりを、気にしてあせっていた私も、〃ああ、彼女にもあんないい場所が見つかった〃と、見ていられるようになりました。

ある時、「せんせーい、できた！」と、大声で叫びながらとんで来ました。彼女は木にぶらさがりながら、一人で下りられるように、工夫したのです。もう登るのも下りるのも、誰の手も借りる必要はありません。つげの木は、完全に彼女の自由になりました。彼女が一人で下りられるようになって、二人で大喜びをしていると、他の子どもたちもつげの木に集まって来て、自分たちも下りられるようにがんばりだしました。登るのはどの子も上手でしたが、いざ下りるとなると、なかなか勇気が出ません。一、二の三でとび下りようとして何度もかけ声をかけるのだけれど、どうしても木から足が離れない子もいます。それでも何度目かの「一、二の三」で、ひらりと舞い下りられるようになる子が、一人二人とふえてきました。彼女も、舞い下りられるようになりました。少し離れた所で、ままごとをしていた子どもたちが、手を振ったり、拍手をしたりしました。集団から離れがちな子どもだからといって、その子が何をしたいのか、何をしているのかを、じっくり見ないで、ことを急いで、一緒に遊ぶことばかりに気をとられていては、いけないのだなと思いました。仲間で遊ばないで、一人でいることの多い子がいる時、もちろん、その原因や理由を保育者はつきとめなくてはいけない。けれども友だち同士で遊んでいる子と同じく、あるいはそれ以上に、その子どもが充実

し、満足していることを見のがさないであげたい。

年長組になって

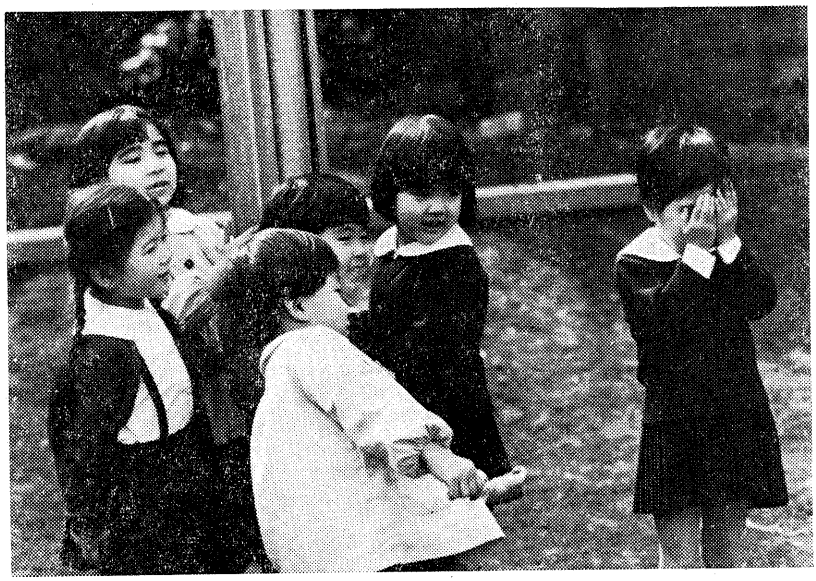
ふじ組からうめ組になり、年長組の生活もしだいに落ちついてきました。私は、迷ったり、困ったり、心配したりで、すべてが順調という訳では決してないのですが、なぜか幼稚園が、楽しくて仕方がありません。子どもたちの活動も、見る見るうちにふくらむようです。

女児たちの間で、チョウチョの羽作りが大流行しました。赤や黄のきれいな羽をつけて、ピアノに合わせて踊ります。箱に、庭で見つけた花びらをいっぱい入れてきて、蜜を吸ったりして遊びます。いつの間にかハチの羽をつけた子が「今度はハチもひいて」とやって来ます。かんむりをつけると〝女王バチ〟もできます。「女の子は好きだなー」と、眺めて言っている男児も、デビルマンの羽やお面をつけていたりします。登園するなり、ロッカーにしまっておいた自分の羽をつけて遊びだします。バラやツバキの花の精も、つぎつぎにできます。素敵な魔法のつえを、一日がかりで作ったりします。つぎつぎにアイデアがとび出し、皆でワイワイ言いながら、作ったり遊んだりするのは本当に楽しいものです。

母の日や父の日にプレゼントを作りました。「ママは指が太いから、大きな指輪にしなくちゃ」「パパは、いつも会社に行く時、『手帳ないかー』って言ってるから、手帳作ってあげるの」……一生懸命考えてプレゼントができると、今度はそれぞれ工夫して、見つけておいたきれいな箱に入れたり、リボンをかけたり、〝こわさないでください〟と、はり紙をつけたりして包装します。小さな手で作った小さな包みは、まさに宝物です。

集団で活動することも、ぐんとふえてきます。手つなぎオニや、開戦ドン等のゲームも、自然に人数がふえてきます。ハンカチ落としにしても、以前は仲良しの子同士、落とす人が決まりがちだったのが、男児も女児も入り混ざり、皆で楽しむことができます。あまり友だちと遊ぶのが少ない子どもの所へも、ごく自然にハンカチが落とされます。遊戯室で、ほんの二～三人で始めたすもうも、あっという間に人数も歓声もふえます。年少組のころは、力の余った子どもはただがむしゃらで、また、消極的な子は、いつまでも見る側だったりしたのが、自分たちで順番を決めたり、何人勝ち抜くかと猛然とファイトを燃やします。〝おすもうやってます〟のはり紙が、遊戯室の入口にはってあったりします。

ままごと遊びも、アイデアがつぎつぎと繰り出します。室内か



ら戸外へ出ることによって、遊びもずっと発展するようです。庭にはえている雑草を集め、茎から実をしごいてお米を作ったり、草を水につけてから砂の中へ入れて〝てんぷら〟ができ上がります。池にビニール製のさかなを浮かべ、それを釣って、タイヤに木の枝を集めて作ったかまどで焼きます。場所も、すべり台、ジャングルジム、池のそば、木の根もと等、子どもたちは本当によく工夫して、格好の場所を見いだします。草や木や土が身近にあることは、素晴らしいなとつくづく思います。

十月に初等科の運動会があり、年長組は〝旗のダンス〟の遊戯を行ないました。見せるためのものを行なうことの意味を問う間もなく、見せるとか、見られることを、あまり意識しないで過ごしてきた子どもたちと保育者は、右往左往しながら練習しました。練習が終わると、急に生き生きとなる子どもたちを見て、自分の指導の至らなさを感じたり、「早く、運動会が終わるといいのに」と、内心思いました。幼稚園よりもずっと広い初等科のグラウンドで、当日が初めての子どもたちが、ポツンと置かれる旗を中心に、円を描けるかしら……こちらの心配をよそに、子どもたちは「大丈夫」と平気な顔をしています。当日、入場門に並び、レコードが鳴り始め、子どもたちは両手に旗を持って行進して行きます。先頭は、あのつげの木の女児です。広いグラウンドのせいか、なかなか円につながりません。入場門にたたずむ私は、今にも飛び出して行きたい気持ちです。子どもたちも、円ができないのを感じているようです。その時、サッと先頭が中心の旗に近寄って、きれいな円がつながりました。保育者が声をかけて手助けできない所で、自分たちだけでできたのです。レコードに合わせて、皆、一生懸命ダンスをします。いつもふざけていたKちゃんも、Sちゃんも、ちゃんとやっています。〝いざやる時なのだ〟ということは、どの子どももちゃんと感じていたのです。――今でも、この時の舞い踊っていた青い旗の色と、何とも言えない感激を、忘れることができません。

〝私の保育〟は、まだ模索中です。ただ〝一人一人の子どもを大切に〟ということは、忘れないようにと思います。未熟な保育者であろうと、模索中であろうと、子どもたちも、日々の生活も、とどまることを知りません。ややもすると、それに押し流される自分を省みて、これからも〝私の保育〟を求めて行かなければならないと考えます。

（学習院幼稚園）

橋詰良一著

「家なき幼稚園の主張と実際」より（三）

第六　純情発露の日記

特に私は幼児と相触れる若き女性の純情が、日々にきらめき輝く有様を書きとめておくように習慣づけることに努めました。すなわち何よりも先に、日記帳を用意しておいて、「明日の心づもり」と「その日その日の所感」とだけを簡単に書きつけるだけを唯一の義務として若い娘さんに課したものです。（前項の当用日記を使用した園の日記の他です）

これは、私と娘たちとが連絡されている唯一の鎖ですが、娘の純情と幼児の間に頻発する火花のひらめきを見させてもらうための頼みに他ならぬもので、一般の教育界に見るような職業義務による保育案とは本質において違っています。（たとえその形においては相似たものであっても）

私の園での帳簿といえばわずかに左の三種です。すなわち、

「明日の心づもり」普通のノートへ好きな方法で書かせるもので、晴の場合と、雨の場合の両様を簡単に記入しておきます。保育案のようなものです。

「所感録」これが最も大切な帳簿で、これを見ると純情と神性の相触れて起こる心火の輝きが見られるのです。

「日記」（普通の当用日記を用います。）記入の主なものは集合所の内外温度といろいろのことをして行なった時間とです。このほかに事務的にするための帳簿は作っているところもあり、作っていないところもあります。

◇　児童愛の日記から

若い先生たちがおもいおもいに書きつけた日記が私の書斎には幾十冊と重ねられてあります。八年の間、私は毎朝毎朝早く起きてこれを見て行くのを楽しみにしてきました。（その帳面は日記

などと一緒に毎日午後私の宅へ届けられるような便宜が作ってありますので、私が毎朝見たのを園へ返すようにもなっています。(それは私の住宅地から先生が大抵一人ずつ各園へ通っていてその便宜をしてくれるようになっているのです)そして見るうちに涙をこぼすことがたびたびあります。その飾りけのない、一口に言えば初心な下手な書き方で児童愛を卒直に表わしているかわいらしさ、無邪気さ、そしてその中から尊いものがチラチラとほの見ゆる気高さに打たれて、胸詰まるようになる時、すぐに涙がこぼれます。

私はこのようなとき、その文の横に赤い印をつけておきます。すると、先生たちは、その部分だけを別の紙に書いて私へ届けることになっていますが、それだけでもずいぶんの量になっています。

どうしても、それを世の母姉たちに見てほしいとおもって、娘たちに取らせている雑誌「愛と美」の主材も実にこのなかから摘まれているのですが、摘まれた中から更に摘み分けて見た宝石(私のための)の幾つかを、是非見てほしいと思います。

初めのうちは、ずいぶん拙い書き方をしていた娘たちの文章が、いつとはなしに奔逸してきれいな名文章となるには驚きますが、純愛=それは恋愛の場合にでも=に伴う神の恵与だと考えたりしますと一層頭が下がります。

教育というようなことに何の予備知識もない初心な娘たちが、かわいいかわいいから生み出していく愛の道、愛のいとなみ、おのずからに養われていく児童愛の理解その鋭さ、清らかさには、更にゾッとして衿を正さしめられる時があります。

ここに摘まれてある文には、一字一字も修正をしてないことを申しそえておきます。

(注)読者のなかには、子どものつかっている方言の解されないのが多いことだと思いますが、そこにもまた幼児生活を髣髴させている力があるのだとご辛抱願います。

智恵子

◇かわいい鳩が

今日は正月の十日です。久々で幼児たちに会える……と思って飛び立つほどうれしい。みんなのあいらしい顔を一人一人連想しながら園に行くと、一番に越野さんが「先生おはよう!!」とたもとをつかむ。男の子も女の子も喜びにハチ切れそうな顔をしてブラさがる。

「先生、また鳩が死んだのよ」って悲しそうな声を出して誰やらつげにきた。アヽ、またしても鳩の死……震えながら出て見ると、元気に屋根で遊んでいるのは十四羽しか無い。二十羽もいた

のに……と思うともう涙です。

「先生死んだ鳩かわいそうね」と言ってじっと死んだ鳩の方を見つめている。子どもたちの心はどんなだろう。（箕面）

◇　柳を振って　　治子

お土産の飾り枝のこしらえに取りかかる。柳の枝へつけるために子どもの手でできた自由製作を配ると各々にあてがわれた小枝をテーブルの下において、あのおぼつかない手つきで羽子を、羽子板を、花を、と一つ一つ数の増すほどに美しくなるのを見て皆の顔もかがやいてきます。

窓の方を向いて夢中になっていた小さい男の子がさもうれしそうに、

できたできたうれしいよ
できたできたうれしいよ

と枝を高くさし上げて、振りながら歌いました。いい曲だ、だまって聞き入ったがノートにひかえてみました。皆も口の中で合唱しているように見えました。（池田）

５３１｜５３１｜２２５５｜３－０
デキタ　デキタ　ウレシイ　ナ
５３１｜５３１｜２２５５｜１－０１｜
デキタ　デキタ　ウレシイ　ナ

◇　おひなまつり

堀尾さん、川島さん、加賀さんのお家からおひな様やたくさんの美しいお道具を貸して下さいました。天神様、お姫様、特に長いお振袖の黒い目のお人形、四人ずらっと赤い毛せんの上に並んだ。その前にお花やお菓子も上げました。舟木さんも急いでお家へ走ったかと思うと男の子、女の子の西洋人形をかかえて来た。杉村さんの筒袖のお人形もお仲間入り、賑やかになった。男の子も女の子も大喜びで私の顔や人形の着物をのぞき込んでそばを離れません。川島さんのお母さんも手伝って下さった。そのうち加賀様から赤白のおいしいおまんじゅうを二つのお盆いっぱいお雛様と子どもさんにと下さった。子どもたちには思いがけないことで一層のよろこびに踊らんばかりです。

皆の顔はかがやいた。朝拝がすむとお部屋へ走りこんでご馳走にとりかかる。三ぼう折る子、お料理する子、見る間におひな様の前へずらっとならぶ。「お人形さんはあんまりご馳走が多いので困っていなさるでしょう……」みんなの子へ、満足するだけお菓子を分けて、附添の女中さん、じいやさんにもお仲間入りをしてもらって、ほんとにうれしくいただきました。「今日はいちんち、おへやを離れるのはイヤよ……」と子どもたちは人形の帯や

着物をいじってつきっきりです。その前で弁当もいただきました。一時からは橋詰先生もいらして「星の国からゆらゆらと」のお唱歌も聞いていただきました。ほんとにおもしろい一日でしたよ。愉快な一日でございましたのよ。（以下略）

◇ よもぎもちつき

雪が舞って寒いのに枯草のかげにはもう緑の春のお仕度ができています。雑草の小さい芽にまじってよもぎも白っぽい芽を出しました。ままごとをするとて、子どもはそのよもぎをかきわけかきわけさがします。そしておもちつきです。平たい石の臼に石ころのきね。おもちつきがはじまりました。はじめはだまってついていましたが途中から歌い出しました。

ぽんぺんぽん　　ぽんぺんぽん
ぽんぺんぽんのう　ぽんぺんぽん
ぽんぺんぽん　　ぽんぺんぽん
ぽんぺんぽんのう　ぽんぺんぽん

そのかわいい声、菊ちゃんはまだおねんねの時には、おばあちゃんのおっぱいがないとおねんねできない子どもですのに……。

神様のうた、子どものうた…こうしてつかれたよもぎはみんなでまるめました。どの手もどの手も濃く染まりました。「よもぎのいいにおいがしますよ……」と言うとみんな自分のお手々をにおってみて「ほんに、おもちのにおいがする」と言いました。お豆さんほどの大きさのおもちがどっさり並びました。（宝塚）

◇ 園のお父さま

智恵子

「今日ね橋詰先生がいらっしゃるのよ、十時ごろに」って朝行くなり、そうお伝えすると皆大喜び。

羽織をぬいでしまいたい位ポカポカ暖かい陽あたりのいいお庭で子どもたちと共にお待ちしてたが「橋詰先生はまだ？」と聞きに来る子どもの顔を見てじっとしていられない。森垣先生に「みんなで停留所までお迎えに行かないこと？」ってお伺いすると「ええそうしましょう。お手々をつないで皆一緒にね」とほほえみながらおっしゃる。ご病気上がりと思われないほど今日は元気に喜びにしたったごようすなので私までうれしくなってくる。春陽を背に一杯浴びて躍り上がる様な足どりで馳け出す私たちの群、この大地は私たちのものよ!!　って高らかに叫びたくなる。この群は一ヵ月ぶりでなつかしい園のお父さまにお会いできるのだものうれしいのはあたりまえ、小躍りするのも当然だ。「ああ橋詰先生が、あ、橋詰先生や」と玻璃窓を通して見つけた幼児たち、われ先にと走り出す。辻さんは先生の重いカバンをさげて喜ぶ。

平素先生の側へひっつきにこない男の子たちが今日はまっさきにぶらさがる。お手々のつなげなくなった子は上着をつかむ、ついには喪章をひっぱる。橋詰先生もうれしげにニコニコして慕い寄る幼児等のおつむをなでていて下さる。ほんとうにうれしい一日。（箕面）

◇ 粘土とり

朝早うから子どもを連れて西の方の広場へ粘土取りに行きました。よい粘土をそれぞれおかごに一ぱい取って、皆でエッサエッサと大喜びでもって帰りました。今日はさっそくそれをねっては粘土細工です。小さな芸術家は小さな手を器用に働かせていろいろなものを作ります。長くのばして「これはへび」まるくまるめて「おだんご」、バナナ、お舟、お鉢、土びん等上手にできたのをお土産に持って帰りました。（雲雀ヶ丘）

◇ ジャガ芋掘り

奈良から帰って今日で三日目、子どもたちは健康に、見違えるほど大きくなっている。誰の顔を見ても元気ではちきれそうである。今さらの様に子どもの成長のいちじるしいのに驚かされる。それにしても鳩の家の前の畑の作物もずいぶん大きくなった。何もかもしばらく見ない間にすっかり成長してしまった。トマトはまだ少し青いけれど、ジャガ芋は収穫を待つばかりに大きくなっている。小さな手によって真心こめて毎日つちかわれたたま物を見る時、何かしら感激に胸がいっぱいになる。もうジャガ芋をそろそろとり入れねばならぬ。「今日はジャガ芋掘りをしましょうか」と子どもたちに相談すると「うれしいな、ほんとにジャガ芋ぼくたちとっていいの」と大喜びで賛成する。「さあ皆お砂遊びのざるを持って来ましょう」「それからコップもね」一度にかけ出したかと思うとあちらからもこちらからもいろいろなものを持ってきた。渡辺先生は大きな鍬を持ってこられた。「さあ掘りましょう。この木をうんと引っぱってごらん」この声も待たず一度に十幾本の手が出る。手の方がからみ合って思うように引っぱれない。はたに立って見ている子どもの顔も異様にかがやいている。やがて「うん」と一つ引っぱり上げられた。大きなのや小さいのが五つ六つぶら下がって出てきた。「やあ出たあ、ジャガ芋が出たあ」大きな声で勝どきをあげる。見る見るうちにあとの五、六本も引きあげられた。「先生こんなに大きいのがあった」「先生こんな小さいの」ほんとに子どもの握りこぶし位なのや小さい豆さんのようなのがざるの中に入れられている。ぬいたあとをスコップや鍬で掘りかえすと、また五つ六つあった。皆で大小

とりまぜて二十六個位とれた。「先生これ皆どうするの」「さあ、これ皮をむいて、煮て、皆でいただきましょうか」「ほんと、ぼくたち食べるの、ええ、食べるの」「ええほんとうよ」「うれしいな、うれしいな」またしても大喜び。今までに一度もこんな経験を持たないから……うれしいのだろう。（以下略）

◇ 武庫川の水遊び

よね子

武庫川のお川遊び。夏にめぐまれたこの自動車幼稚園のみのもの、お川遊び。それは幼児たちにとって一番愉快な、そして比類なき園のブライドのお川遊びが参りました。

美しい友禅の半袖に朱塗の下駄または軽いセーラー服に白い海水袋と水筒をかけた姿、みんな軽装に勇みおどった幼子が、自動車に一ぱいになって新町につく。幸田先生が乗って下さる、木内先生も……歌もひとしおにぎやかに……長い長い西成大橋から新装の阪神国道を滑っていく気持ちは、まあ何といったらいいでしょう。「兄ちゃん、急行出してちょうだい」と注文しますと、運転手の兄ちゃんは「オーライ」とばかり二十五マイル、三十マイルものスピードを出して下さる。トラックも電車も見る見るうちに追いぬいて……子どもたちは得意に手をたたきます。

武庫川の阪急停留所で待ち合せて下さる母様姉様たちと一緒に、子どもたちはころぶようにして、松の下の着物の置場から、川へ、川へと飛び出します。オシャモジ、水鉄砲、バケツそ他のいろいろの玩具を手に手に水煙を立ててきれいな砂川を右往左往……水合戦、鬼ごっこ、運河掘り、いろいろなことが思いのままに始められます。おもいのままに創作されます……細かい細かい砂、ひえびえとした水底のなめらかな感触、赤や青黄、色とりどりの美しい配彩、朗らかにすみわたった群青の大空、ほんとに子ども雑誌のような思いがしてうれしさに胸のおどるのをおぼえました。二度も三度も、ぬれた身体を日に乾かしてはまたぬれて木陰のお昼飯にご馳走を頂きます。その時のうれしさ、黒く健康そうな血色、そして包みきれぬ笑顔……ああ、ほんとにこうした純ななごやかな心の芽ばえを、いつまでもいつまでもきずつけられることなしに大切に育ててゆきたい……そうあってほしいと祈らずにはいられない。生きとし生けるものに、この幼子の無邪気さ、いつわりなき飾りなき心の一つさえも、生涯失わずあるものでしたら、まあ、この世の中はどんなにか明るく楽しく美しいものでございましょう……大事そうにかにや、せみや、バッタや貝の数々をお土産に、活躍後の軽い疲労を自動車の風にやすめてすやすやと午睡のあどけない顔に、祈りと、感激のほおずりを致しますのは私一人ではございませんでしょう。（大阪）

◇ クローバー　和子

お並びをするなり堤防へとまいりました。まだ朝早いので涼しい風が吹いて、何となくすがすがしした気持ちでした。高い坂をころころと和夫さんがころがりながら降りて行きました。こちらには白いクローバーの葉の上にころがって喜んでいる弘ちゃん、向こうの方にも白い子どもの姿「やあ東の幼稚園が来ました」と叔母さんの声に見るとたくさん走ってきます。「お早う！」ってこちらから合図をしましたら私のまわりへと集まって「お早う先生」ってまつわりました。みんなでクローバーの葉の上にすわって白い花を持ちきれないほど摘んでいるうち、私はふと四ツ葉を見つけましたので、「S先生四ツ葉よ」って言うと幼児は「先生ここにも」ってたくさん持ってきてくれました。「何かいいことがある」と言いましたら道子ちゃんが「そしたら私家に帰ったらおいしいお菓子がもらえるかもしれんわね」って申しました。（西十三）

◇ ささ舟流し　治子

今日はいつもより水が多いのでみんな川の辺を離れない。

「ささ舟流しをしよう」と相談がきまって裏の土手のささを折っては皆で造り「さあ一二ノ三で流しっこしましょう」「やあ僕のが一番だ、小西池君のはくるくるまいしたので負けたよ」と一生懸命……オーエスオーエスと勢いをつけると一層早く流れる気がする。私共も流れについて行った、橋の下を通っている間はじっとしては待っていられない。我一にペッチリ腹ばいになって姿が見えるのを待っている子どもたちは、洋服や、エプロンのよごれるのよりも舟の方が大切なので大人には到底想像つかない現われである。

Yちゃんが水の中へ足をつけて「先生こんなの」と見せに来る。「どうしたの」と尋ねると、「村主君がはいれ言いよったから」といかにも真面目くさったようす。お友だちの言うことはよく聞く……かえって親や先生よりも……。（池田）

◇ 穴掘り　おちほ

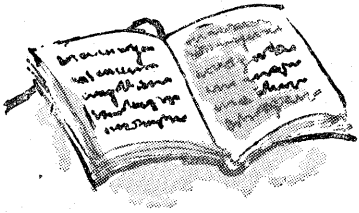
昼からお庭で穴掘り、皆が一生懸命になって、今度は東南のすみへ大きな大きなのを掘りました。小さな子どもの力でも大勢よって、皆が力を合わしてすると、どんな事でもできます。掘って行くうちによい粘土がでてきて大喜びです。今度はお団子をたくさんこしらえました。（雲雀ヶ丘）

（つづく）

◇講演◇

幼児にあらわれる人間の原型

津守　真



私どもが外部から見ることのできる子どもの行動は、子どもの世界のすべてではありません。私どもは子どもと共にいて、一緒になっておもしろくなったり、ふしぎに思ったり、心に感じるものがあります。また、ひとつの行動の中に、これから伸びてゆくであろう、いろいろの可能性を感じとることができます。保育の実践においては、客観的観察眼や、理論的思考よりも、主観的感覚や直観をはたらかせていることが多いように思われます。もちろん、客観的観察や、理論に基づいた判断を軽視するわけではありません。ある時点で、子どもからはなれて、冷静に見られることは、自分にとっても、子どもにとっても大切なことがしばしばあります。しかし、その場合でも、保育の最中には、そのような態度に徹することはできません。そして、全体として見るならば、保育者が、心に感じ、可能性を見る保育者自身の眼が失われたら、保育から、いきいきした生命力が失われることになるでしょう。

保育を、大きく見るならば、実際の保育の場における保育実践と、保育の後や前に、保育の場で起こったことを考えること、すなわち、保育の考察とに分けることができます。保育実践における保育者の態度は、子どもと共にあり、そこで起こっていることをそのままに感じとることのできる実存的な態度であるということができるでしょう。その態度を失って、他の人の作った方式やプログラムに身をゆだねたら、子どもとともに創ってゆく創造的な生活とはならないでしょう。保育実践においては、その人の直観や感覚が生かされねばならないといえます。

保育が終わって後、そこで起こったことを考察するときには、より多く思考をはたらかせることを必要とします。そのときに

は、分析したり、分類したり、相互関係をみたり、段階に並べてみたり、いろいろと操作することができます。そのような外的操作が有効なこともありますが、保育者が保育の中で起こっていたことを理解し、次の保育実践につなげてゆくのには、それとは別の思考法があります。それは、再び、保育実践の際に用いた、直観と感覚を補助とする思考です。すなわち、保育の場で心に感じた体験を、もう一度、自分の心にとらえ直すところから出発します。あるいは、子どもの残した何らかの具体的な表現、作品などを、ゆっくりと味わうところから始めます。

保育の最中に心に感じたことは、すぐ次の行為を生み、それはさらに新たな感動を生んで、一か所に止まるところがありません。そして、それは、次の日の保育へとうけつがれてゆきます。保育の実践としては、それだけでよいともいえます。けれども、いろいろの精神機能をもった大人として見るとき、保育者はそれだけで満足できない場合が多くあります。保育の行為とはいったい何であるのか、子どもをどのように理解したらよいのかなど、いろいろの疑問が出てきます。そこで心に感じたものを、もう一度とらえ直して、そのことの意味を問う作業をすることに、大人としての意味が生まれてきます。

第一に、保育の場面で、保育者が心に感じたことを、自分の内的感覚によって、体験し直すことです。保育の最中には、次々とできごとが起こるので、内的にふれたものは、心の琴線にふれただけで、通りすぎてしまう場合が多い。しかし、子どもの方は、保育者の忙しさとは関係なく、自分自身の見方で生活していきます。その子ども自身の見方は、論理的思考によってすすむのではなく、また、目的に向かってまっすぐに進むものでもありません。それは、大人から見たならば、突拍子もなかったり、ばかげたようにみえるほど、主観的、空想的であったりします。子どもは、客観的な物を知覚しているのではなく、自分の内的感覚でとらえています。それは大人になる過程のどこかで、背後にかくれて、論理的、客観的な見方が優先してしまいます。大人は、しばしば、内的感覚で物を見るのに努力を要します。けれども、人間の中にはいつでもそれがあることは明らかで、すぐれた絵画などを通して、その画家の見方に眼を開かれる思いがすることは珍しくないでしょう。子どもの見方は、まさに、芸術家の眼のようなものです。子どもの見方に少しでもふれようと思ったら、子どもと共にいた場面を、大人自身の内的感覚でとらえることが必要になります。子どもと全く同じ見方をすることはできないけれども、子どもの見方の特色であるところの内的感覚に価値をみとめ、それを大人は使ってみるならば、子どもと共通のもの

にゆきあたるでしょう。

第二に、子どもの行動にふれて、大人が自分自身の心に感じたものを、自分自身の体験に照らして、その意味をたずねることです。子どもの行動は、意図的、意識的なものの連鎖として生じるよりも、むしろ、心の底に動いているものが、そのまま、行動として外面にあらわれるであると思います。その点で、子どもの行動は、子どもの心の世界の表現と見ることができるでしょう。具体的な行動としては、身近な小さなことに見えても、子どもにとっては、それが全世界であり、ごくわずかの時間のできごとであっても、そこには時間をこえた世界があるのです。そして、具体的なことがらは異なっても、その行動を通して感じられるのと同じことを、大人自身の体験の中に見いだすことができます。大人の場合には、生活空間が広くて複雑だったり、意識的な歪曲がなされていくのでわかりにくくなりますが、子どもの場合には、それが直截にあらわれるのだと思います。たとえば、大人が、心の中に求めるものがあって、長年月かけて、いろいろのことにふれて道を求めてゆくのと同様に、小さな子どもは、泣いたりわめいたりしながら、自分の求めているものをさがし、一日の間に、あるいは何週間かの間に、その行動はしだいに変化してゆきます。出口がわからないで模索している段階、自分の中に中心を見いだして統合ができた段階など、その心の状況に応じて、子どもの描く描画が変化していったりします。具体的な生活の上でのあらわれ方は異なっても、人間の心の原型ともいえるものが、子どもにも大人にも共通にあるのだと思います。大人は、そのあらわな姿を、子どもの素朴な行動にふれることによって気付かされます。子どもが直観的に感じとっているものを、大人は、子どもの行動の連鎖の系列の中に発見することもありますが、それは、分析し分類する思考をはたらかせるときには、失われてしまうので、直観をはたらかす思考が必要になるといえましょう。

従来、保育者が、子どもとの心のふれ合いの中でとらえてきた子どもの生活は、主観的といわれて排除される傾向がありました。保育者も、明瞭な教育意識がもてないときに、そのことに劣等感を感じることが多くありました。けれども、こうした正面の議論から排除されてきた主観的なものこそが、保育活動の主要な部分を占めてきたのです。それがなかったら、子どもの心にふれてじっくりと交わることもできず、大人は子どもとすれ違いの生活をつづけてゆくことになるでしょう。いまや、この主観的といわれてきたものに位置を与えて、その部分に光をあてていかなければならないのだと思います。

きょうは、こういう考え方に立って、幼児の行動のいくつかを

考えてみたいと思います。保育における子どもの行動は、実に多様であり、まだ、その全貌を見渡すことはできません。また、それは、常に保育者や研究者自身の歩みと切り離すことはできないので、どこからでも、その人がたまたま出会ったところから始めてよいのだと思います。

ひとつの体験

私が大学を卒業してしばらくして、この付属の幼稚園にはじめて参観にきたとき、砂場で三歳の子どもが遊ぶのを見て、非常に驚きました。とても一生懸命に遊んでいるのです。私が近くにいるのも気がつかないくらい、熱心に遊んでいました。それを見て、子どもはこんなに一生懸命になれるということを、まざまざと知りました。私も若いころで、勉強が楽しくてしょうがなかったのですが、大学生が勉強をしている姿と、子どもが砂場で遊ぶ姿とは同じだと思いました。大人の目からみると、砂場の子どもは、砂をこねたり、指をつっこんだり、水をいれたり、単純なことのようにみえますが、そばでみていると、それは一生懸命なのがすぐわかります。ああ、これだなと思いました。小さいときに、こんなに自分を打ちこむ生活ができているということが、人間にとってどんなに大切なことなのかおぼろげにわかったような気がしました。それ以来、同じような場面に何度も立ち会っていますが、子どもが一生懸命に生活し、遊びに没頭することの大切さを思わざるをえません。それがいろいろの能力が出てくる母胎であるし、また、子ども自身が成長してゆく場所であると思います。また、それと同時に、いろいろの幼稚園にいきますと、子どもがほんとうに遊べるように、まわりをつくっている幼稚園がどんなに貴重なことか、それが決してたやすいことではなく、大人が一生懸命になって整えなくてはできないことだと考え続けさせられています。

一方、その中にいる先生はどうかというと、子どもが自分のなまの姿を出して遊んでいる中で、大切な点をちゃんととらえている。参観者や管理者からは、あんなことをさせて困ったとか、あんなことをしてどうなるのだろう、と思われるようなことの中にも、子どもの生活をちゃんと見てとり、その中に、子どもなりの考えや感じ方のあることを体で感じとり、一緒に子どもと楽しんでいるようすがみえます。そうしている間に、子どもはまた変化していき、いつのまにかわきまえをもった、立派なおもしろい子どもができ上がっていきます。こういうことを、何度も何度も、くりかえし見せてもらっているように思います。

先生の側からいうと、自分の見方が変わってくると、子どもの

ことがおもしろく見えてくるようです。「こんなことをしなくては」とか、「こんなことをして困ったな」と思いすぎたり、またどうしても今日じゅうにここまでやらなくてはとあまり思っていると、子どもがやりたいと思っていることや感じていることが見えてこない。自分がどうしても今日じゅうに、あるいは、今週じゅうにしなくてはならないことだけが見えてしまって、子どもの中の貴重な芽ばえを見のがしてしまいます。私どもがどういう目で子どもを見るかは、ずいぶん大切なことと思います。もう少し先に進みましょう。

内部の不思議さ

私は先日、三歳の子どもから、折紙を不規則にいく重にも折りたたんだセロテープでやたらにはりつけたものをもらいました。手にとっていじってみていると、子どもは、カメラだというのです。カメラに似た形ではありません。それは、手にとってよくみると、内部はさらに折りたたんであって、いく重にも中に折りこんであるのがわかります。紙を折ること、重ねること、たたむことは、いずれも、平面から立体をつくる作業です。何回か折ってたたむと、そこに内部ができます。ときには、子どもは、自分が一生懸命にかいた紙の上に別の紙をはりつけ、さらに何枚も紙をはり重ねて、かいたものを見えなくしてしまいます。かいたものは、奥の奥の内部にいれこんでしまうのです。折り紙を折りたたむだけではありません。立派な画用紙にかいたときにも、かき終わると、それを丸めたり、不規則に折りたたみ、持ち歩いたりします。せっかくかいた、しわのない紙を、折ったりたたんだり、のりをベタベタはりつけてしまうのですから、そこだけを見ていると、大人はそれをとめたくなります。けれども、子どもはごく自然に、折ったり、重ねたりするのですから、そうしなくてはいられない子どもの感覚が動いているのです。

子どもは、物体にふれたときに、その物の内部に興味をもちます。カメラは、中から写真が出てくる密閉した箱ですから、子どもにとっては特別ふしぎな物です。カメラというのは、そういうふしぎな内部をもった箱なのです。だから、子どもが一枚の紙からカメラを作ろうとするとき、一枚のペラペラ紙だったらカメラにならないのだと思います。形は似ていなくても、折りたたんで内部をつくれば、カメラになります。カメラの本質は、形にあるのではなくて、中から絵の出てくるふしぎな内部にあり、それがカメラであることを、子ども感じとっているのです。

内部のある物を子どもが好むことは、まだほかにも、いろいろのところでみられます。まだ幼稚園に入らないくらいの小さな子

どもが、お母さんの古いハンドバッグを肩にかけたり、手にもって歩きまわって遊ぶことは、どこの家庭にもみられる姿です。紙で何かをつくれるようになると、ハンドバッグやかばんを好んでつくります。ここの幼稚園を見ていましても、園庭でビニールの袋に砂利をいれて持ち歩くのは、しばしばみられます。洋服のポケットは、子どもが興味をもつもののひとつです。子どもと遊んでいると、いつのまにか、ポケットの中に木の葉や砂利がはいっています。ポケットに手をつっこんで、何があるかな、といってもったいぶってとり出すと、子どもはきっと興味をもってみつめます。

内部は、いつまでも内部のままにとどまっていません。それは開いてみないではいられません。おみやげは、紙に包んで、箱にいれて、そのまわりをまた紙に包んで、いく重にも包まれている中にはいっているところに、魅力があるのです。子どもは、胸をわくわくさせながら、それを開いてゆくのが楽しいのです。いく重にも内部に包みこまれているところに、心もこめられているかのようです。

ダンボールの箱をおくと、子どもはきっとその中にはいります。そして出たり入ったりしてあそびます。子どもが最も好むあそびのひとつです。道路のわきにおいてある冷蔵庫に入って出られなくなった事故の話が新聞にときどき出ます。最も悲惨な事故のひとつだと思います。

子どもは、物の外側をみて、その内部をいろいろと空想します。木の実や種は、子どもが最も不思議に思うもののひとつのようです。私どもも、小さな種の一粒をてのひらの上にのせてみると、ほのかに暖かさを感じ、その内部の世界にいろいろと空想をめぐらします。中味をわってみても、特別目に立つものも見られません。けれども、種の内部には、すべての成長の根源がはいっていることを疑いません。子どもは、種のえとかいて、その内部に部屋をかき、いきものをいれたりします。種の内部の世界を見ているのです。子どもは種の内部に不思議さを感じているのですから、それを大切にしたいと思います。子どもを一列に並ばせて、こまごまと注意を与えて、一粒ずつ種を配給して。子どもはたいくつしながら順番を待って、植木鉢に種まきをするというようなことはないようにしたいものです。

子どもがえをかくとき、見えない物の内部をかくことはしばしばみられます。ねこや犬の動物のえをかいたとき、おなかの中に食堂があったり、寝室があったりすることは珍しいことではありません。子どもが動物をみるとき、外側ばかりでなく、内部を見ているのであることがわかります。あのもじゃもじゃした毛皮の

中にはおなかがある。そのおなかの中には、何かが入っていると思うらしい。子どもの描画には、内部や中味、内側に包みこむことをかこうとしている例はいろいろありますが、ここでは省略します。

さて、こういうことは、子どもにふればごくあたりまえのことですが、考えてみるとなかなかおもしろいことです。内部というものは目に見えないところです。子どもはその見えない内部があることに興味をもち、不思議に感じ、探究しようとするのです。私どもも、子どもを見るとき、とく行動の外側だけを見がちですが、ここには内部があることを疑うことはできません。子どものする活動には、大人の目に見えるところだけではなくて、目に見えないところにいろいろのものがある。それが何であるかはわからないけれど、子どもにとってとても大事なことであると察することができるということは、大人にとって大切なことであると思います。

そのときにはわからないことが、あとになってわかってくること

先だって、私は、ある幼稚園に見学に行きました。初めての幼稚園ではあり、乱してはいけないと思い、すみの方でそっと見ていました。すると一人の男の子が、「おじちゃん、いいものを見せてあげようか」と寄ってきました。私は「うん、みせてくれ」というと、私を自分の部屋につれてゆきました。「ほら」といって戸棚を開くと、そこには、ヤクルトの小さなびんや、牛乳びんなど四十個ほど並べてあり、色水が作ってありました。たくさんあるのでおどろいて、みんな今日作ったのかときくと、「ちがう、毎日作ったんだ」といいます。何週間かかったか知りませんけれど、毎日作った色水を戸棚の中にためてあることに、私はたいへん感心しました。それだけのことをやって下さる先生は、なかなか度胸もあるし、えらいと思いました。その四十個の中には、きょう飲む牛乳も入っている。

「これはなかなかすごいなあ、たくさんあるなあ」と感心してそばにすわって見ていると、そこにひとりの女の子がきまして、「おじちゃん、ごちそう作ってあげる」とお盆にのせていろいろ持ってくる。「あめ、作ってあげる」といって、リボンに色をぬって、ボール紙にはって出してくれました。私は「おいしそうだなあ」としゃぶっているうちに、その子はだんだんなれてきて、私の背中によじ登り、そのうち、首に、頭によじ上ってきました。私はその場を乱してはいけないし、静かにしていなければと思っていましたが、相手にならないわけにはいきませんでした。

ちょうど、その女の子が少し離れたとき、他のクラスや、廊下のすみや、遊戯室にまわっていくと、気がついてみると、その子がまた私の横にちゃんといるのです。「おじちゃん、あげようか」といって、また何かもってくる。いろいろ話しかけてくる。一日だけ見学にきたおじちゃんに、こんなに寄ってくるのは、何かはわからないけれど、何かはあるのだろうと思い、その子とおしゃべりをして過ごしました。ただそれだけのことですが、後で先生にうかがうと、その子どもはお父さんがいないのだとのことでした。また、先の男の子は、ふだんからエネルギーをもてあまして、先生だけではどうしていいかわからないときがあるとのことでした。子どもが何か言ってくる時というのは、その子にしてみると、大人に何か訴えたい、そうしなくはいられない何かがあるのだと思います。それが何であるかは、そのときにはわかりません。その瞬間には、その子のいうことを聞いたり、積極的に遊んだりするでしょう。そうやって子どもと交わってゆくうちに、その子の中にある大事なものが何かだんだんわかってきます。それが子どもとの保育的ふれ合いの実際だと思います。

さきほどの砂の話にもどりますが、三歳の子どもが、一時間、あるいは一時間半も、一生懸命になって砂遊びをするというのは、いったいどういうことなのでしょうか。また、いったい何が面白いのでしょうか。いまの話の筋でいくと、保育者にとって、それは何かわからなくてもかまわないわけです。保育者にとっては、子どもがそんなに一生懸命にやっているのだから、そこには、そうしなくてはいられない気持ちがあるのだということを知っていれば、その理由を頭でわからなくてもかまわないのだと思います。そのことを考えるのは、後になってからのことです。

土をこねることの意味

よくみていますと、形をつくるようになる前に、子どもはいろいろのことをしています。土や砂を手でたたく、指をつっこむ、砂をにぎる、にぎって持ち上げてパラパラと落とす。砂をほうり投げる、手をつっこんで奥の方に手をいれる、水を流す、水でぐにゃぐにゃにこねるなど。三歳以前の子どもだと、それが大部分です。五歳、六歳になって、形を作れるようになっても、このようなことをたくさんしています。私どもも、同じように、砂の中に手をいれてみると、見ていただけではわからなかったことがわかります。土や砂の中に手をつっこむと冷たい。その砂をにぎって、持ち上げて、パタッと落としてみます。自分がにぎっていた砂が、パラパラ落ちるのはなかなか愉快なことだと気がつきます。物の形を作る以前に、冷たさとか、土や砂とふれる快さがあ

り、それが土や砂の大切な点です。近ごろ、シャベルやくまでのようなものがよく使われますが、道具を使う以前に、てのひら、腕、あるいは手の中で、もっと直接に砂や土をいじることが大事だと思います。また、砂場や土の上にペタッとすわってみると、おしりからずーっと伝わってくる冷やかな感覚があるのがわかります。体の下から伝わってくる土の感覚、大地の感覚がありま す。靴をぬいではだしで土の上を歩くことは、子どもにとって大きな体験です。現代の道路はコンクリートで、家に帰ってもコンクリートの家で、はだしで歩いても気持ちのいいところが少なくなりました。ほんものの土の上をはだしで歩くというのは、子どもにとって大切な体験だと思います。これから都会の生活が人工的になるほど、それとは逆の昔ながらの土の上をはだしで歩くことを、子どものために積極的にとっておいてやらなければ、子どもは大地を知らないで大きくなってしまうでしょう。そうなると、子どもは人間の根底にあるいちばん大切なことを忘れてしまいはしないかと心配になります。

はだしで土をふみ、おしりの下から大地を感じ、そして土をこねる、そうやって子どもは土の性質を知ってゆきます。土の性質にしたがって何かを作るわけです。紙で作るのと、木で作るのと、プラスチックで作るのとそれぞれ違います。作るというのは、素材の性質にしたがってなされる作業です。水分をふくんだ土をにぎると、自然に形ができます。両方のてのひらで押せば、平らなおせんべいができるし、両手で回せば、おだんごができます。それを両手でもみつづけると、へびになります。ねばねばした粘土だったらそうなるが、かわいた砂だとそうはいかない。こうして、手の性質と、土の性質と両方が合わさって自然に形が生まれます。砂や土で作るというのは、最初からこういうものを作ろうということが頭にあって作るのではなくて、こねているうちに自然にできてしまう場合が多いです。しかも自然にできた形というのは、土の性質にかなっているので、おもしろい形ができる。昔から土で作った器やつぼは、人間の文化の中でも非常に古くからあるわけです。

プラモデルはこれと対照的です。最初から作るべき設計図があり、部品が決まっていて、この部分品とこの部分品をつけて、こうして部分が最初にでき、あらかじめ作ってある設計図に合わせて作っていきます。作るという行程において、砂をこねる、土をこねる、粘土をこねるのと、プラモデルを作るのと、正反対の働きだということがわかります。近ごろ小学生でも、プラモデルはやるけれども、木をけずって、船や飛行機を作ることが少なくなりました。私が少年のころにはプラモデルはなかったし、木をけ

ずって自分の好きなような形に作っていくのは、非常におもしろかった記憶の中のひとつです。木をけずっていると、思いがけない形ができる。その思いがけない形がヒントになって、また次の形を作るという具合で、プラモデルでは得られないおもしろさがあります。

土と砂は、こねているうちに、思いがけない形ができますが、あるところまでいくと、子どもはそれをこわします。できるとこわすまでがひとめぐりで、子どもはできたものをとっておこうとしない場合が多いのです、時には、あしたまでとっておいてね、と言うこともありますが、ひとつできると、それをこわして、もとの土にもどすというのは、子どもにとって自然なことのひとつだと思います。われわれの精神の作用は、ある所までくると、自分の精神的無理もでてくるし、自分の自我、個性もでてくるし、それは自分に気にいらないものになり、またもとの大地にもどしてやるという性質を持っているようです。混沌の中にもどしてやって、そこでもう一度出発することにより全然ちがうものができる。作るものをこわすという行為には、こうした積極的な意味があるように思います。

保育という仕事のことを考えてみると、土いじりと大変似ていると思います。最初から設計図をひいておいて、一部のくるいもないプラモデルを作る作業と、保育の作業とは大変違う。その日の保育からどんなものができるかは、最初からわかってはいません。ひとつひとつの段階で、先生が子どもと一緒になって考えたり、子どものやることに感心したり、子どもが持ってきてくれるものに、ああこんなものがあったと思って、そこでおもしろく思って手にとってみたり、それからまた、先生も今日はこんなことをしようと思って物を出したり、物を作り始めたり、そうやっていくうちに、その中に子どももひきこまれていきます。あの子の生活、この子の生活、ひとりひとりの子どもの生活が集まり、そしてまた先生の生活が加わって、だんだんに変化し、一日の終りになり、ああ今日はこんな一日が送れたと、ある時は満足し、ある時は心残りの気がしながら、一日の生活が作りあげられていきます。こういう保育者の一日、子どもの幼稚園の一日は、ちょうど土をこねるのと似ていると言っていいでしょう。なおもう一つつけ加えるならば、子どもと先生の間に生まれる熱気です。一生懸命になって、夢中になってやるのは熱気です。そうやって、精神的な火が燃やされ、何か心の底からわき上がる熱気があって、そこは思いがけないおもしろい幼稚園の一日ができ上がっていきます。

地下のイメージ

いま、土を子どもはどうしてそんなにおもしろくいじるのかということから話を始めましたが、土をいじっていると、もうひとつおもしろいことに気づきます。木の下の土をいじっていると、土の中から虫が出てきたり、卵や幼虫が出てきます。幼稚園で砂場を作ることは、日本では一般的になりましたが、土をいじることは、これから特に大事なことになると思います。土をいじって虫が出てくることを、子どもは不思議がり、喜びます。土をいじるのがいやな子もいますが、それも、ある壁が破れると、子どもは積極的におもしろさを持ってみるようになります。一体どこから虫がでてくるのだろう、と土をほじって見ると土の下に虫が住んでいる。その土の下にもうひとつの世界があることを、子どもは信じて疑いません。だれでも、小さいときにありの穴をほじった記憶があるだろうと思います。ありの穴の中には何があるのだろうとほじっているうちに、土でふさがってしまって残念でたまらない。子どもにお話をするとき、ありの穴を前にして、その中のありのおうちのお話をすれば、きっと幼稚園の子どもは喜んで聞いてくれます。

地面の下にはもう一つ別の世界があるということは、大人にとっても重要です。われわれの見えている世界だけでなく、自分の心の奥の方に別の世界が口を開いている。この中に入っていくと、あなたにも、私にも共通の世界がある。子どもは、そういうつながりを、ありの穴いじりながら見いだしているのではないかと思います。

ここにある絵は(写真1)、手紙いれの袋のために、子どもがすぐに書いてくれたものです。地面があって、ポストがある。おもしろいことに地面の下にもう一つ穴があって、その中に生きものが入っています。子どもにとっては、地面の下の世界があることは疑いのないことなのです。手紙をいれるというので、地面の下に通路がついています。空には、鳥がとんがいて、おひさまがある。地面の上の空にも、子どもにはいろんな世界があるんです。人間は、その間を歩くのです。子どもは、心の中にある世界を、目で見える形にしてみせてくれます。大人の頭では馬鹿げているかもしれない。忙しい大人の生活では、自分のスケジュールしか目にうつらないのです。早くしなければおくれるからというのは、大人の世界のことで、子どもは、そこにじっとして、地面をほじくって、とどまっていたのです。そうやっていると、こういう地下の世界が見えてきます。子どもの地下のイメージを示す例はまだたくさんありますが、このくらいにしておきましょう。

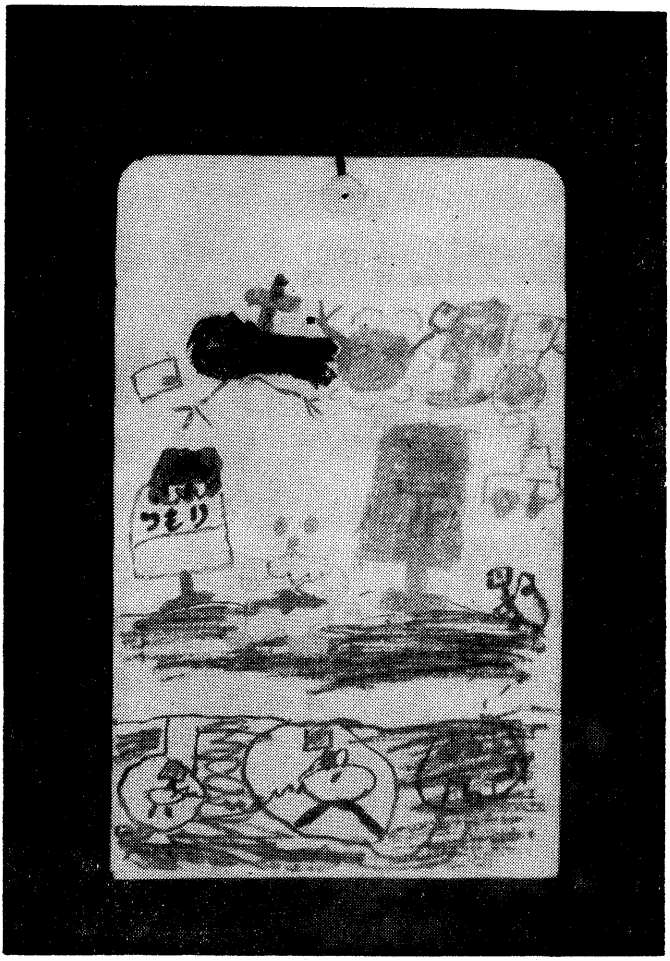


写真　1　色の説明（上から）

・空の鳥　黒（手紙をくわえている）

・自動車　緑（左はし）
　赤（右はし）

・うさぎ　ピンク（顔のまわり）
　水色（体のまわり）

・郵便うけ　紫（左）

・地下道　紫

「かける」こと

人間には、内に向かう心と外に向かう心とあって、あるときにはこちらが、またあるときには他の面が出てきます。ふと気が付いて外に目をむけると、人がたくさんいる、近よっていくとおもしろい世界がある、こう気が付いたとき、人の心は外に向かっています。子どもも入園したばかりのころには、早く家に帰りたいと思って、じっと立っていたり、その逆に、幼稚園じゅうをかけまわったりします。自分の世界をみつけて落着いてくると、先生や友だちに目が向いてきます。子どもはもはや床に目を落しているのでなく、相手に目を向けて、人に向かってゆきます。

同じことが大人にもあります。この子どもと心が通じないと思っているときに、あるとき、子どもの方から、パッと目が向いてくるときがあります。そういうとき、子どもは、土や砂を人に向かってかけます。

私はしばしばこういう経験をしたことがあります。このおじさんはあそんでくれないと思っているときには、子どもは目をまともに向けることもしません。あそんでくれそうだと思うと、何かをハイともってきたり、さらに進むと、土や砂をかけるという行為があらわれてきます。

大人も、ある人に関心があると、その人に目をかけたり、声をかけたりします。子どもだと、砂をかけたり、水をかけたりするのです。それは、この人と一緒にやっていけるかどうか、ためしてみるひとつの段階ではないかと思う。そこから、一緒になってあそぶことが生まれてきます。

「かける」というのは、人の心が外に向かうときにあらわれる行為です。

幼稚園の先生は、同じ子どもを、今日も、明日も、次の日も、つづいて見ていけるので、この子はこんなところまで関心が向いてきたというようにみることができます。ひとつの行動だけを他から切り離して、それをいいとかわるいとか考えないでしょう。成長の中でみていくことができるのです。

「かける」ということについて、もう少し事例をさがしてみましょう。

プールにはいると子どもは運動が自由になります。水の中では動きの自由度が増すようです。そうすると、人に水をかけますが、それは、もっぱら、親しい人に向けられます。仕返しでかけるというよりも、親しみの表現であることの方が多い。

また、ある幼稚園にいったとき、ひとりの子どもが、私にていねいに頭を下げて、お早うございますといったのに、とまどった

ことがあります。この場合は、その子どもと私との間に、社会儀礼がはさまっていて、その子どもの心がじかにとびこんできたのと違うので、とまどったのかと思います。「おじさん、どこからきたの」と声をかけられると、もっと親しさを感じて、にこにこ笑いかえす気になります。

私は、子どもからつばきをかけられた経験が何回かあります。これも普通にあることで、たいがいの人が経験したことではないかと思います。もっと若いころには、つばきをかけられると、侮辱されたように思って、こんな小さい子どもに侮辱されることはないと、むきになって怒ったことがあります。もう少し心がねれて考えてみると、つばきをかけるというのは、侮辱というようなことではないらしい。よく見ると、そのときの子どもの目はきらきら輝いて、笑っている。私はその話を学生さんにしましたら、こういうことを話してくれました。つばきというのは、自分の体の中で製造した大事なものだ。自分の体の中で作った自家製のものは、人を動かす力をもっている、つばきをかけると人を怒らすこともできる。その学生さんがいうには、涙も自家製のものだ。何でも、あるえらい坊さんが、不良少年のような子どもをひきとって、一人前にしようとしたが、どうしても成功しなかった。ついに、別れようとしたとき、その坊さんの涙が少年の足の上におちた。少年はその涙にハッと気がついて、それから本気になって弟子入りしたという話でした。これはいいつたえですけれども、自家製のものが人にかかると、大きな力を与えることを示すものかと思います。

先日、現職の先生方の集りで、似たような話がありました。幼稚園で、子どもが、つばきを土でこねて他の子どもにわたしたら、それまでけんかをしていた子ども同士の間に、和解が成立したということでした。気がついてみると、つばきで土をこねて人間をつくったという創造神話もあります。

そう思って、つばきをかけた子どもの顔をみると、子どもの顔はますますにこにこしています。

つばきをかける行為の中に、子どもが人に向かってくる積極的な姿をみることができると、そこから、子どもと保育者との新しい関係が生まれてきます。

三歳児の作品から幼児教育を考える

ここに三歳児のクラスの小さな子どもが四月から七月までに、かいたり切ったりしたものをかりてきました。私はそれをみて、ああここに三歳の子どもの生活があるな、と思いましたので、その一部を紹介しながら、幼稚園の教育を考えてみたいと思いま

す。（堀合文子教諭のクラス）

写真2を見てください。こういうのを見ると、ほんとに三歳らしいなと思います。自分で破いたのか、破いたのをみつけたのか、その紙片を手にとると、ただの紙切れではなくて、生きて動いたものになるんですね。それに自分がちょっとかきたすと、目がついて、それは自分にとって大事なものになります。三歳児の生活から生れた作品です。

写真3を見てください。こういうのは実におもしろい。だれでも作るものですが、こういうのをいつも作るような幼稚園が本当の幼稚園なのだと思います。自分で何かかいて、切り抜いたものです。クレヨンでしるしをつけた部分は穴ではないかと思います。子どもにきいてもたしかにそうかどうかわかりませんけど、毎日つき合っている人には、その気持ちはわかると思います。穴があいていて、向う側につきぬけているとみることもできるでしょう。前に似たような作品に出会いましたが、それはストーブでした。油をいれる穴がある。子どもにとっては動作が重要な意味をもちますから、穴とは何かをつっこむ動作なのです。

写真4を見てください。これは、うずまきです。大人にも、うずまきのイメージがあるでしょう。どうしたらよいかわからなくて、ぐるぐるさがり求めて、うずまきをかくんです。

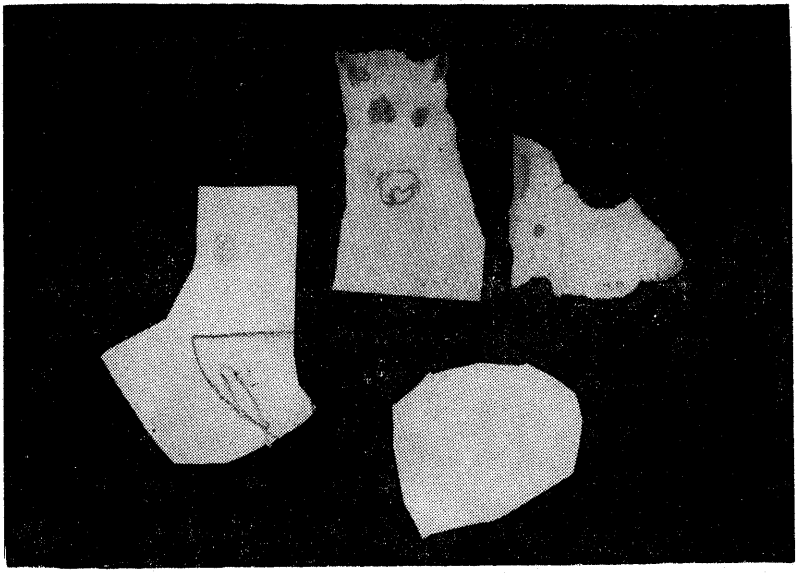


写真 3

写真 2 (a, b)

写真 5

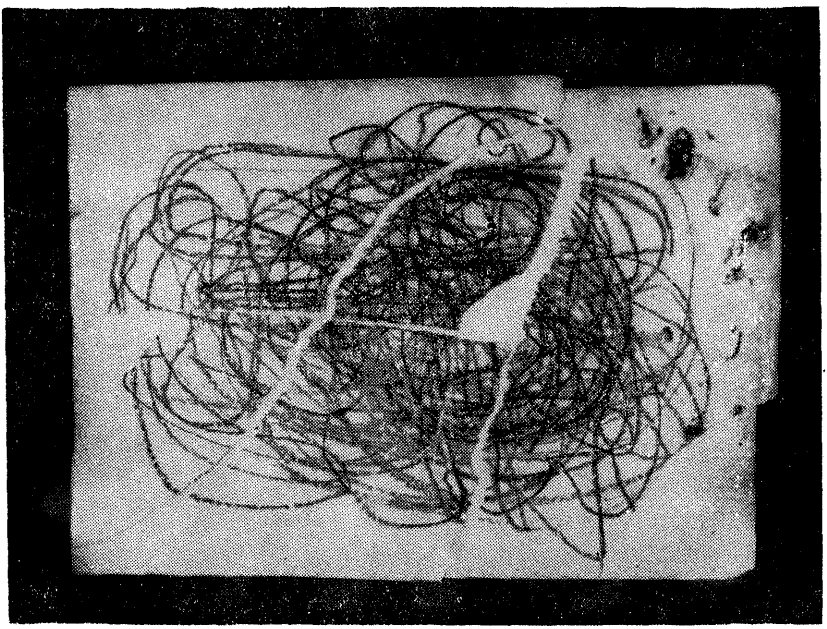


写真 4

その中にこういういいものがあります。うずまきをかいて、強くこすりつけたあまり、紙が破けたものです。それはしばしばうずまきの真中です。ここと思うところがみつかると、いろんな色でぬりたくります。

そうして、きれいな線、多様な動きができるのです（色が美しいが印刷には適さないので省略する）。どうしてよいかわからないで模索しながら、自分の道をみつけ出していくのです。

毎日の生活も同様で、朝幼稚園にきたときに、どうしてよいかわからないときに、今日はあの子と遊べるか、今日はこんなことして遊べるかいろいろさぐります。今日これで遊ぼうと中心がみつかると、三十分、一時間、一時間半と、そのことを追求していきます。一日の生活をみてもそうで、幼稚園の生活とは、子ども自身がさぐり求めて、自分で中心を見いだして、そこに夢中になっていく生活を作り上げる、そういう生活です。その前には先生に話しかけたり、うろうろしたりする時間があります。幼稚園の生活にはこの両方がある。一人でぶらぶらしたり、ぼんやりする時間が保証されないと、次に一生懸命になる生活が出てきません。

いまの幼稚園は、いつでも子どもが何かをしていることを目標にしすぎるのではないかと思います。

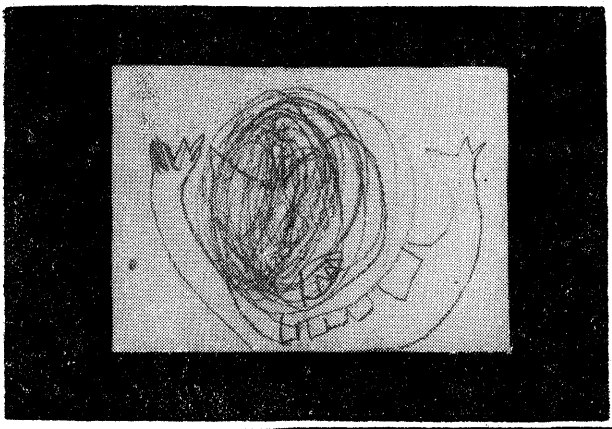


写真 6 (a)

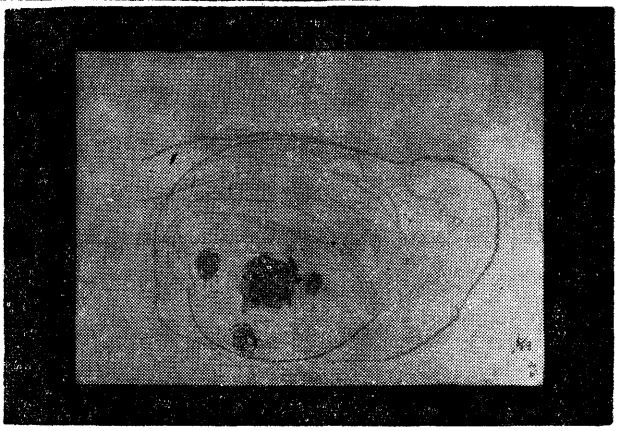


写真 6 (b)

写真5を見てください。これはうずまきですが、はっきりしたうずまきです。これを切りぬいて手にもつというのは面白いでしょう。(59ページ右下)

写真6はうずまきをかいているうちにそれが人間になったものです。人間の顔の絵ができ上がる過程のひとつです。テレビの絵かきうたのようなもので、ハナかいて口かいてチョンというようなのは子どもにとってよくな思いといます。めちゃくちゃができなくなり、心の動きを生活の中であらわし、自分が参加して生活を作り上げることができなくなる。現代は視覚優位の時代といわれますが、そういう時代なればこそ子どもの原始感覚を大切にしなければ人間の基礎が養われないでしょう。

写真7はまわりがはさみで切りこんであります。一つ一つ切るんです。それには紙をまわさなくてはなりません。ということは、これもうずまきということです。真中に、色紙

写真 7

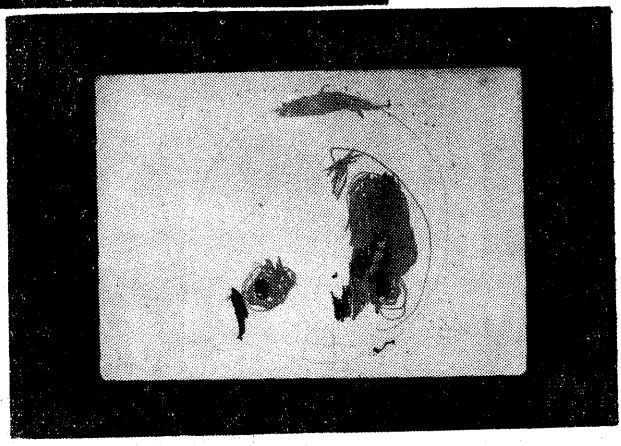


写真 8

をはりつけます。回転の運動感覚です。

写真8の点はリズムです。体が躍動しています。すなわち、心が躍動しているのです。

写真9のデザインはまさに中心のあるデザインです。こういうのをかくようになった子どもは、自分の中で一歩成長していると思います。成長とか発達とかいうのは、決して能力だけの問題ではない、一歩段階をとび上がったという自分自身の体験がある。新しい世界が自分にとって開けてくる体験です。個々のことができるようになったというのが大事なのではなくて、自分が一歩新しい世界にふみこんだ自覚が生まれる生活、それが幼稚園生活です。

写真10はどこの子どもでもかく、「字」です。手紙です。自分の感情をほんとうにあらわしたいとき、子どもは、ほんとの字ではかきせん。線の動きでかくんです。こういう作品は幼稚園で大切にしないといけないと思います。大人が目で見るところをこぎれいにす

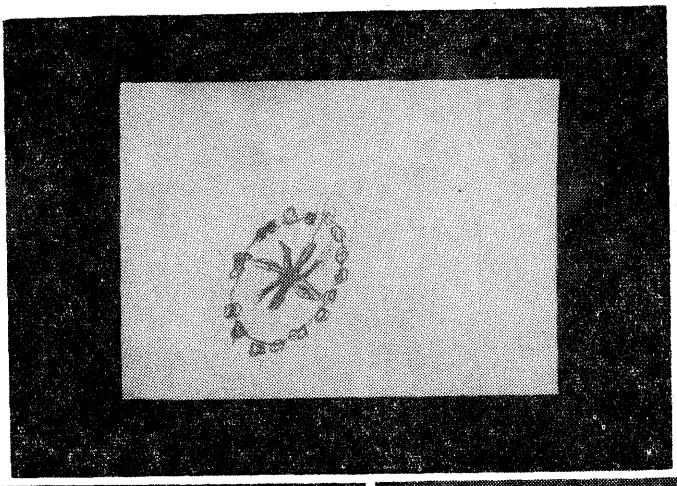
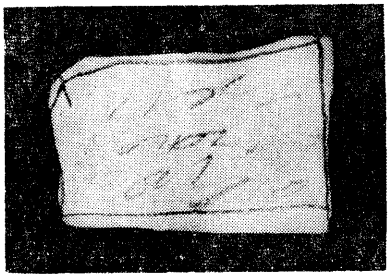


写真 9



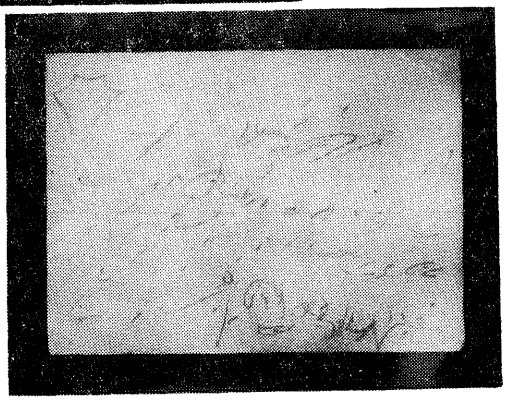


写真 10 (a, b)

ることは考えない方がいいのです。

ここに掲げたのは三歳児のクラスの一学期の作品ですが、これらを見ていると、ほんとうに、やわらかい三歳児の生活が目に見えるようです。こういう作品が生まれる幼稚園が次々にあらわれることを願っています。

これは、昭和四十八年七月二十二日、日本幼稚園協会講習会における講演に手を入れたものです。

三歳児の作品は色、線の強弱など、写真ではあまりよくおわかりいただけないのがとても残念です。

（津守）

第四回みどり会夏季研修会のお知らせ

昭和四十六年から三回にわたり「保育のこころを求めて」全国の幼児教育現場の先生方と、合宿研究会を催してまいりましたが、今年も左記のように計画いたしました。諸物価値上がりの折から、その点、申しわけなく存じますが、内容を豊かなものに、と主催者一同努力しておりますことをご諒承の上、多数のご参加をお待ち申し上げております。

内容その他、詳細は五月号をごらん下さい。

記

一、期日　昭和四十九年八月十九日（月）～二十一日（水）午前まで。

一、会場　熱海市上宿町　ホテル岡本、熱海駅より徒歩約十五分、バス市役所前下車二分。

一、定員　三五〇名

一、会費　一万二千円（申込金、宿泊料、二泊・六食）

一、申込　申込書に、会費一万二千円をそえて六月一日～二十日までにお申込み下さい。

一、申込先　東京都文京区大塚二―一―一　お茶の水女子大学附属幼稚園内
みどり会夏季研修会係宛
現金書留、または振替口座（東京九九〇八五）にてお送り下さい。

一、内容　シンポジュムおよび分科会（七分科会）

一、講師　周郷　博先生、津守　真先生、本田和子先生、ほか交渉中

幼児の教育　第七十三巻　第四号

四月号　©　定価一七〇円

昭和四十九年三月二十五日印刷
昭和四十九年四月　一　日発行

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

お花も笑顔の入園式

簡単にできます!!

キンダー リボンフラワー

〈カーネーション〉 …… 赤・ピンク2輪1セット

● 内容……1輪につき花びら大3枚・小2枚、葉3枚、ワイヤー1本

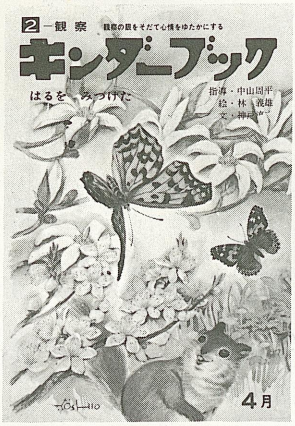
○材料とフエキのり工作君を使って貼るだけで出来上ります。
○新しい工作材料です。
○市販のリボンフラワーにくらべてぐっと安価です。
○カーネーションは年中みられる花です。母の日のほか、としよりの日、卒園・入園・誕生会のプレゼントに最適です。

フレーベル館

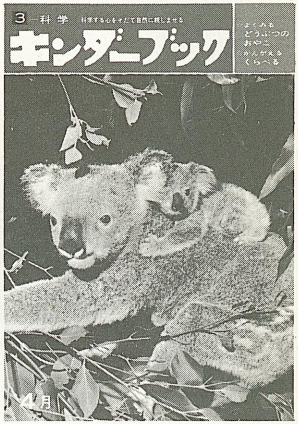
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 (03)292－7781(代)にお問い合わせください。

お子さまの成長に合わせて お選びください

情操をゆたかにし 創造力をのばす
キンダーブック 1ー情操
4月号“こいぬの　ろくちゃん”



観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック 2ー観察
4月号“はるを　みつけた”



科学する心をそだて自然に親しませる
キンダーブック 3ー科学
4月号“どうぶつのおやこ”“くらべる”

幼児の心を育てる
キンダーおはなしえほん
4月号“五つの　はなのえき”

4月号
月刊5誌

園児をもつ母親のための専門誌
ホームキンダー

フレーベル館

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 TEL 東京(03)292－7781㈹にお問い合わせください。